〈講演記録〉

わかりあうために

春　日　耕　夫

（受付　1998年5月20日）

1. はじめに

「わかりあうために」というテーマで話をさせていただきます。お配りしたレジュメに沿って話を進めようと思うんですが，まず初めに，私がこれからお話ししようと思っておりますこととか，私の話を聞いていただくために皆さんにお願いしておきたいこととか，そういったところから始めたいと思います。

(1) ろうあ者の話し合いに参加して

まず第一点目として，最初からこんなことを言うのは誠に申し訳ないことなんですが，実は，私は，ろうあ者問題とか，手話といったことにつきましては，ほとんど何も知らない門外漢であります。ろう（聾）の人たちとのつきあいの経験もほとんどないに等しい状態でありまして，数年前にろうの人たちと一緒に卓球をやったことがありますのと，今年の二月のことですが，7～8名のろうの人たちが集まった会合に同席させていただいたことと，それくらいの経験があるだけですし，手話についても，まったく知らないという状態なんです。

<付記>　本稿は広島県手話通訳問題研究会の要請により同研究会の第5回リーダー研修会（1987.7.19）で行った講演記録に加筆したものである。もともとの講演記録は同研究会編『手話通訳ひろしま』第2号（1988.4）に収録されているが，思うところがあって，今回本誌に収録することを思い立った次第である。本誌への収録の件につき快諾して下さった同研究会に対し、感謝の意を表したい。

そうしますと，当然，「そんな門外漢のお前がどうしてここにきてるんだ ?!」ということになってしまいますけれども，そのことについては，ちょっとしたいきさつがあったんですね。

広島のある地域でのことなんですが，その地域の手話サークルの人たちと，ろうの人たちとの間で，お互いの関係をもっとよいものにしていかなければいけないんじゃないか，というような動きがあったらしいんですね。で，そのためにはお互いが言いたいことを率直に言い合っていくことが必要だろうし，日頃不満に思っていることをぶつけあっていくことがもっと必要なのではないだろうか，そして，お互いの間のコミュニケーションをもっともっと活発にしていって，相互理解を深めていくことが大切なのではないだろうか，ということになっていったらしいんですが，いざ実際にそういう話し合いをやろうということになってみますと，お互いに遠慮があったり，不満を口に出して言うのはどうも，というようなことがあったんでしょうけれども，なかなか簡単にはいかない。

そういった状況のなかで，その地域の手話サークルの人たちとのつきあいがあり，ろうの人たちとのつきあいもあるという方がいらっしゃいまして，その方が，直接話し合うのが難しいのだったら，まず初めに，ろうの人たちだけ集まってもらったらどうだろうか，という提案をされたらしいんですね。で，まずはろうの人たちだけ集まってもらって，言いたいことを言ってもらって，それを，いい人がいるから――その「いい人」というのが実は私のことだったらしいんですが――，その人に聞いといてもらったらどうだろうか。そして，そこで聞いてもらったことを手話サークルの人たちに伝えてもらって，それに対する意見や感想を手話サークルの人たちに言ってもらって，それをやっぱりその人に聞いといてもらって，今度はそれをろうの人たちに伝えてもらう。手始めに，そういうやり方で始めてみてはどうだろうか，という提案ですね。ついては，そういった対話の橋渡しといいましょうか，そういった役割を引き受けてもらえないだろうかという依頼が私にあったわけなんです。

その依頼に対して，私は，先ほど言ったような事情ですから，そういった問題について私は何にも知らない人間ですけどね，というような趣旨の返事をしたんですが，その人からは逆に，「何も知らないからかえっていいのよ」と言われましてね。何にも知らなくていいんだ，白紙の状態で，率直な気持ちで聞いといてもらえばそれでいいんだ，などと言われまして，お調子者なものですから，「それならば」というわけで，引き受けてしまったんです。

そういった事情で結局ろうの人たちの話を聞かせていただくことになったわけなんですが，その話を聞きながら，私は，何ていうんでしょうか，とにかく，驚くことの連続でした。「えっ，そんなことがあるんだ！」とか，「どうしてそうなんだ?!」とか，「なるほど，そうだろうなあ」といった調子で，本当に驚くことの連続だったんですね。

たとえば，拝見していますと，ろうの人たちどうしの間では，話しかけるのが大変難しいようなんですね。手話というのは，確かに，ある面では便利ですよね。遠く離れた人どうしでも自由に会話できますし，私たちだったらとても会話できないような騒音のなかでも手話でなら平気で会話できますし，そういう点では確かに手話というのは便利なように見えるんですが，その反面，手話だと，話しかけるのが難しいんですね。いくらこちらから話しかけようとしても，相手のほうが気づいてくれなければどうしようもない，みたいなんですね。

そんな場合，ろうの人たちはどうするのかといいますと，話しかけようとしているのに気づいた人が，話しかけられている人の肩をポンポンとたたいたりして，「ほら，○○さんがあなたに話しかけてるよ」というふうに教えてあげる。そういうことが実にスムーズに，ごく自然に行われている。そういうやりとりを見ていますと，皆さんにとっては当たり前のことかも知れませんけど，私のような者には実に新鮮で，「なるほどなあ」と感心してしまうんですね。

そのほか，すごく印象的なこととか新鮮な驚きを覚えることがいろいろ

ありまして，実に貴重な経験をさせていただいたと，いまでは感謝している次第です。

そういうわけで，これから私がお話しさせていただこうと思っておりますのは，そのときの90分ほどの話し合いを聞かせていただくなかで私に見えてきたろうあ者像といいましょうか，ろうの人たちが抱え込んでいる問題といいましょうか，そういったことについて話してみようと思っています。

ただ，私に見えてきたろうあ者像といいましても，わずかそれくらいの経験を通して感じたこと，考えたことですから，私の話のなかには間違いもありましょうし，見当違いなこともあるに違いないと思うんです。ですから，私の話を聞いていただく前に是非とも皆さんにお願いしておきたいのは，私の話を「専門家」の話だというふうには考えないでいただきたいということなんです。その道の経験豊かな立派な先生の立派な話を聞いて正しい知識や考え方を学ぶんだ，なんてふうには絶対に考えないでいただきたいんです。もしそういう考えをお持ちの方がいらっしゃいましたら，いますぐそんな考えは捨てていただいて，これからの話は門外漢の話なんだぞということを，しっかり頭のなかに入れておいていただきたいんです。

門外漢の話ですから間違いもありましょうし，トンチンカンなことを言うかも知れないと思うんです。でも，私としては，それでもいいのではないかという気持ちでここに来させてもらっております。間違ったことを言ってはならないというんでしたら，とてもじゃないですが，私のような者がこんなところで話すなんてこと，できるわけがありませんから。

ですから，もし私の話のなかに間違いや見当違いなことを感じられましたら，そのときはどうぞ遠慮なさらないで，「あれは間違いよね」とか，「見当違いよね」というふうに，言ってほしいと思うんです。そして，もし間違いがあったとすればそれはどういうふうに間違いなのか，どんなふうに考えればいいのか，というようなことを皆さんの間で話し合っていただければありがたいと思っています。

もしそうしていただければ皆さんの討論がそれだけ活発になるわけですし，私の話が皆さんの討論のたたき台としてお役に立てたことになると思うんですね。そうしますと，たとえ私の話から正しい知識や考え方を学ぶことができなかったとしても，だからと言って，私の話が無駄だった，なんてことにはならなくてすむと思うんです。皆さんの間の討論や議論のための素材の提供といいましょうか，討論を活性化させるための触媒の役割といいましょうか，それくらいの役割は果たせたことになるのではないかと思っているわけなんです。

以上，私の話を聞いていただくための注文といいましょうか，聞き方についてのお願いをしたわけですが，最初から謙遜ばかりして皆さんをがっかりさせては申し訳ありませんから，ひとつ，尊大なことも言わせていただこうかと思うんですが，実は，私は，門外漢の俺の話なんて無意味だ，なんてふうにはあまり考えていないんです。むしろ，「俺は門外漢だからこそいいんだぞ！」と思っている部分も実はあるんです。

実際，門外漢だということは，ひとつのメリットでもあると思うんです。皆さんは長い間この世界で仕事をしてこられて，この世界には馴染んでしまっていらっしゃる。しかし，馴染んでしまうということはある意味ではこわいことでありまして，馴染んでしまうと何もかもわかってしまうというか，わかったような気持ちになってしまう。そうなると，本当は問題であっても，それが問題だということに気づけなくなってしまうことにもなりかねない。もちろん，皆さんがそうだと言っているのではなく，馴染んでしまうということには，一般的に言って，そういうこわいところがあるということを言っているだけなんですけどね。

それに対して，私のような，その世界を初めて経験する者にとりましては何もかもが初めてのことで，何にもわかっていないものですから何もかもが新鮮で，ほんのささいなことにも驚いたり，不思議に思ったりもします。ですから，その世界に馴染んでしまった人なら何の疑問も感じないで見過ごしたり，当たり前すぎて振り向きもしないようなことでも，「これは

いったい何だろう？」とか，「どうしてこうなんだろう？」とか，「なるほど，こんなことがあったのか！」と驚いたりもします。その意味で，門外漢というのは，その世界に馴染んでしまった人には思いも及ばないような発見をする可能性をもっているのかも知れないんですね。そうしますと，もしかしたら門外漢だからこそその世界での経験豊かな人たちに新鮮な話題を提供できるのかも知れないと思いまして，その意味で，「俺は門外漢だからこそいいんだぞ！」と思ったりもしているわけです。

それと，もうひとつだけ「偉そうな」ことを言わせていただきますと，私はこれまで社会学の勉強をしてきまして，不充分ながら調査の経験も少々はありますし，インタビューといって，いろんな人の話を聞くことを通して物事を考えるという練習もいくらかやってきました。そういった人間といいましょうか，社会学を勉強し，調査の練習もいくらかやってきた人間が身につけてきた技術といいましょうか，そういうものをもってろうの人たちの話を聞くとすれば，そういった経験のない人とはまたひと味違った聞き取り方ができるかも知れないと思うんです。そうしますと，その意味でも，私の話が皆さんのお役に少しぐらいは立てるかも知れないと思ったりもしているわけです。

そういうわけで，謙虚にばかり構えるなんてことはやめにして，責任感などかなぐり捨てて，間違いがあったらあったでいいではないかという気持ちで話をさせていただくつもりでおりますので，その点，どうかご了解下さいますようにお願いします。

(2)　ある学生の発言

次に，第二点目ですが，先ほども言いましたように，そういった事情で聞かせていただくことになったろうの人たちの話に私は大変感銘を受けましたし，そのときの話にはいろんな物事を考えていくのに役立つ素材がいっぱい含まれていると思ったものですから，そのまま放っとくのはもったいないと思いまして，私が勤めている大学の授業の教材としても，大いに活

用させていただいています。ゼミといって，７～８名の学生と一緒にやっている授業なんですが，そのゼミで，聞かせていただいた話を材料に，この半年間，ずっとディスカッションしてきたんですね。

その授業での出来事なんですが，「感想はどう？」と学生たちに質問したんです。すると，ひとりの学生が，何やら，口のなかで，モゴモゴつぶやいているんです。それで，「いま何て言ったの？」と私が聞きますと，その学生は「いえ，まあ」と言って言葉をにごすものですから，「いいから言ってごらんよ」とさらに催促しますと，「こんなこと言っていいのかなあ」とためらいながら，「ろうの人って，甘えが強いんですね」と，本当に言いにくそうに言うんです。

そんなこと，言ってはいけないんだと，この学生は感じているんですね。何しろ，「ろうの人って甘えが強いんですね」という言葉には何かしら冷たく響くところがありますし，乱暴に言ってしまえば，差別的な印象を与えかねないところがありますからね。だからその学生はその言葉を押さえようとしたんでしょうけど，いくら押さえようとしても実際のところではそう感じてしまっているものですから，つい，口のなかで，モゴモゴつぶやいてしまったんですね。そういうことがありました。

そこで，お配りした資料の＜１＞をごらん下さいませんでしょうか。これはあるろうの方がなさった話なんですが，実は，先ほどの学生が「ろうの人って甘えが強いんだな」という感想をもってしまったのは，その学生がこの資料を見たときのことだったんですね。そこで＜資料１＞なんですが，それはこういう話です。

「学校のことなんですが，先生と私と通訳者がいて，三人で相談するとき……」。つまり，学期末のいわゆる「三者面談」のときのことでしょうか。そこに手話通訳の人も一緒に行っていただいて先生との相談をするわけなんですが，他のお母さん方，つまり耳の聞こえるお母さん方は，配られたプリントを見ながら，充分な時間をかけて，じっくり先生と相談していらっしゃる。だけど，私の番になると，先生がプリントを渡して「何か質問は

ないか」と言われれるんだけど，そう言われてもプリントに何が書かれているかすぐにはわからないし，質問はないかと言われてもすぐにパッと質問する能力もないし，そんなわけで「いえ，その」なんて言っているうちに，「それじゃあ」ということで相談を打ち切られてしまう。私が質問しないものだから，他の，耳の聞こえるお母さん方と比べると相談時間はうんと短くて終わってしまうし，あっという間に打ち切られてしまう。だから，と，この人はおっしゃるんですね。手話通訳の人にそこらあたりのところを補ってもらいたい，と。手話通訳の人もご自分の子どもさんを育てるときのような気持ちになって考えてほしいし，質問はないかと言われてもパッと質問できない私たちの立場を考えてほしい。教育とか育児とかの面で私たちが足りないところを補ってほしい。しつけについてもね，と，こういう話です。

この人がおっしゃりたいことは，要するに，手話通訳者は単なる通訳者で終わらないで，「補足者」とでもいいましょうか，そういう役割も果たしてほしい，ということですね。

通訳というのは，文字どおり理解しますと，こちらの人の言葉をあちらに伝え，あちらの人の言葉をこちらに伝えるという仕事。ですから，「何か質問はありませんか」と先生がおっしゃればその言葉をこちらのお母さんに伝えるでしょうし，そのお母さんが何かおっしゃればそれを先生に伝えるんでしょうけれども，このお母さんは「いえ，その」ということで，何にもおっしゃらない。そうすると，通訳者としての仕事はもう何もないわけで，そうこうしているうちに「それじゃ，おしまい」ということになって，何の相談もできないうちに終わってしまう。それでは困る，というのがこのお母さんの気持ちなんですね。何しろ私たちは情報不足だし，経験も不足してるんだし，だから質問はないかと言われてもパッと質問することができないんだから，手話通訳者は単なる通訳者で終わらないで，私たちの足りないところを補ってくれる「補足者」でもあってほしい，と。

この話を聞いたとき，先ほどの学生は「この人，何て甘えが強いんだろう」と感じてしまったというわけなんですが，そういった感じ方がいいか

悪いかということは別にしますと，そういった感じ方には，それはそれで，それなりにスジの通った理屈があるんですね。それをはっきり口に出して言えばいささかひどい言い方になってしまいますから言いにくいんですけれども，問題をはっきりさせるために，思い切って言ってしまおうと思います。それは，要するに，こういう理屈なんですね。——だって，この人の場合，質問はないかと言われてパッと質問できないというのは，それが始めての経験だったわけではないんでしょ。それなら，そうなることは最初っからわかっていることなんだから，質問したいことをあらかじめ考えておいてですね，なんならそれをメモにして通訳者に渡しておくとかね，自分でできることが何かあるはずなんだから，そういうことを精一杯，まずは自分でやってみるべきなんじゃないですか。そうやって自分でできることを自分で精一杯やってみて，それでもなおかつできないことがあったときにそれを補ってほしいと言うんだったらわかりますけど，そんなこともしないで，私たちは情報不足だからとか，経験不足だからといって補ってほしいと言うのは甘えというものではないでしょうか，と，こういう理屈ですね。

そういう理屈が正しいか間違っているかということは横においときまして，その前に，私は，そういう考え方というものは，人と人との関係にとって，いったいどんな意味をもつのかということを考えてみたいんですね。そうしますと，そういう考え方というものは，決して，人と人の関係を豊かにしていく考え方なのではなく，むしろ，人間相互の関係を貧しくし，不幸なものにしていく考え方なのではないかと私は思うんですね。どうしてかといいますと，そういう考え方に固執していけば，当然，「本人がしっかりしなきゃダメよ！」とか，「だからろうの人ってダメなのよ」ということにしかなりませんし，「そんな人って私はイヤ！」とか，「そんな人とのおつきあいなんてまっぴらごめんだわ」なんてことにしかならないと思うんですね。

しかし，この学生が特別ひどい人間だとか，特別心が冷たい人間だというのでしたら，それでもなお，大して深刻に考えなくてもいいのかも知れ

ないとも思うんです。だって，そんな人間が一人や二人いたところで，どうってことないでしょうからね。しかし，実際には，その学生は決してひどい人間ではありませんし，心の冷たい人間でもないんです。むしろ，とてもいいやつなんです。とてもやさしい男ですし，気分がよくて，まじめな学生なんです。

そうしますと，いったいどういうことになるんでしょうか。この学生のような感じ方や考え方は決して特別ひどくて心の冷たい人間だけの感じ方，考え方なのではなく，むしろ，私たち健聴者の大多数が身につけている考え方であり，感じ方だということになってくるのではないでしょうか。そうしますと，これは，大変大きな問題になってくると私は思うんです。

そういうわけで，私は，人と人がお互いに理解し合うというのはいったいどういうことなんだろうか，そのためにはいったいどんなことが必要なんだろうか，というようなことを，あらためて考え込んでしまったわけなんですね。本日の話に引き寄せて言えば，私たち健聴者がろうあ者を理解するというのはいったいどういうことなのか，健聴者とろうあ者の間にコミュニケーションが成立していって，相互に理解し合っていくためにはどんなことが必要なのか，という問題ですね。そういうわけで，今日は，話のテーマを，「わかりあうために」とさせていただいたわけです。

以上が話を聞いていただく前に申し上げておきたかった第二の点です。前置きが長くなってしまいましたけれども，要約しますと，本日私がお話ししようと思っておりますのは，「私に見えてきたろうあ者像」ということと，そのことをふまえながら，「わかりあう」ためにはいったいどういうことが必要なのかということを考えてみたい，といったところです。

2. 判断の二様式

さっそく本題に入っていこうと思います。「わかりあう」ためにはいったいどういうことが必要なのか，ということですが，そういった問題について考えるためには，まず初めに，物事に対する判断のしかたとして，どん

なやり方があるのかということを考えてみる必要があると私は思います。

そこで，まず，物事に対する判断のしかたなんですが，私はそれを二つに分けてみることができるのではないかと思っています。判断の二つのしかた，あるいは，判断の二様式とでもいいましょうか。ここでは，それを，さし当たり，他にうまい言葉が思い浮かばないものですから，「評価的判断様式」と「事実的判断様式」という言葉で言っておきたいと思います。

以下，順に説明していきます。

(1) 評価的判断様式

まず，第一の「評価的判断様式」ですが，これはどういうことかといいますと，要するに，物事に対して「いい」とか「悪い」とか，「正しい」とか「正しくない」とか，「道徳にかなっている」とか「不道徳だ」とかいうふうに，評価を下すような形で判断をする判断のしかた，ですね。いずれにしても評価を下すような判断のしかただという意味で，「評価的判断様式」と呼んでおこうというわけです。

もちろん，私たちはしょっ中そういった判断を下しながら行動しているわけですし，そういった判断を下していかないことには，自分がどのように行動していいのか，わからくなってしまいます。大げさに言えば，そもそも生きていくことさえできなくなってしまいます。

その意味で言えば，評価的判断様式というのは私たちにとって非常に大切な判断のしかたですし，生きていくうえで絶対に欠かせない判断のしかたなんですけれども，そういった判断のしかたしかできなかったり，そういった判断のしかただけにしがみついていたりしますと，とても困ったことになってしまいます。

そこらあたりのことをわかりやすくするために，評価的判断様式というものについてもう少し考えてみたいと思うんですが，その場合，先ほどの学生の，「そんなの甘えだ」という発言を例にとりながら説明していこうと思います。

まず，「そんなの甘えだ」という判断が評価的判断そのものだということ，これははっきりしていますね。「そんなの甘えだ」ということになりますと「そんなのはダメだ」ということになってしまいますし，「そんなやつはダメなやつだ」ということになっていきますからね。それはまさしく，「いい」とか「悪い」というふうに「評価を下す」判断ですから，評価的判断そのものだと言っていいと思うんです。

ですから，この例について考えていただくだけでもわかりますように，評価的判断というのは，人と人との関係のなかで，その相手の人を理解しようとする視点であるというよりは，むしろ，相手の人を「いいやつだ」とか「ダメなやつだ」というふうに，裁いていく視点になってしまいやすいんですね。そうやって他者を裁いていくのが評価的判断様式なのでありまして，他者理解への途を開くものでは決してないと私は思うんです。その意味で，他者を裁いていく視点になってしまいやすいこと，他者理解への途を開く視点ではないということ，これが評価的判断様式というものの第一の問題点だと言っていいと私は思います。

次に，「そんなの甘えだ」「それではダメだ」ということになりますと，当然，「そんな甘えの強い人なんてイヤ！」ということになりましょうし，「そんな人とのおつきあいなんてまっぴらごめんだわ」なんてことになってしまうでしょうから，評価的判断様式というのは，人と人との関係のなかで，その関係を断ち切っていく視点になりやすいということになりますね。「さようなら，もう二度と会うまいね」って。もっと乱暴に言いますと，「そんな甘えの強いやつなんか地獄に堕ちてしまえばいいんだ！」なんてことにもなりかねません。その意味で，評価的判断様式というのは人と人との関係を断ち切ってしまう視点になりがちなのでありまして，人と人との関係を豊かに作り上げていくものではないんですね。

この場合，人と人との関係を豊かに作り上げていくということを「関係の豊富化」という言葉で表現するとしますと，評価的判断様式というのは関係豊富化への途を開く視点ではない，ということになりますね。その意

味で，人と人との関係を断ちきってしまう視点になりがちだということ，関係豊富化への途を開く視点ではないということ，これが評価的判断様式というものの第二の問題点だと言っていいと私は思います。

次に，評価的判断様式というのは，いま言いましたように，他者を裁いていく視点になりがちなんですが，それでは，そうやって他者を裁くというとき，その裁くための基準は何なのか，いったいどんな基準で他者を裁くのか，という問題。それはもう，わかりきったことでありまして，そのときの基準というのは，実は，その人自身のものの考え方なんですね。つまり，その人は，自分自身のものの考え方を基準にして，それに照らして他者を評価して，「こいつはいいやつだ」とか「ダメなやつだ」というふうに裁いていくわけなんです。

そうしますと，評価的判断様式にしがみついている人というのは，実は，自分自身のものの考え方にしがみついている人なんだ，ということになってしまいますね。その意味で，評価的判断様式にしがみつこうとする人というのは，自分のものの考え方を唯一の正しい考え方として絶対化してしまう人なんです。つまり，その人は，要するに，自己絶対化の立場に立とうとする人でもある，というわけなんです。

そもそも，確信ある評価的判断を下すことができるためには，その判断を下すときの基準になるものの考え方の絶対的正しさを確信していなければならないわけですから，評価的判断様式というのは，常に，自己絶対化の視点に結びついてしまいがちなんです。これが評価的判断様式というものの第三の問題点だと言っていいと私は思います。

次に，自己絶対化というのはどういうことかと考えてみますと，自分自身のものの考え方を絶対的で正しいと考えるわけですから，現に在る（現在の）自分の考え方に執着する，ということになりますし，現に在る（現在の）自分というものに執着する，ということになってしまいます。そうしますと，その人は，現に在る（現在の）自分というものに執着するわけですから，その人自身がいろんな経験をしながらいろんなことを吸収して

いって，どんどん変わっていく，というふうにはならないわけです。当然，その人自身がますます豊かな人間になっていくというふうにもならないわけです。そうしますと，その人自身がどんどん変わっていってますます豊かな人間になっていくということを「自己豊富化」という言葉で表現するとしますと，評価的判断様式というのは，まさしく，この，「自己豊富化」への途をも閉ざしてしまう判断のしかたなんだ，ということになってしまいます。これが評価的判断様式というものの第四の問題点だと言っていいと私は思います。

以上，評価的判断様式というものの問題点について述べてきたわけですが，要約しますと，評価的判断様式というのは，自己を絶対化し，自己の基準で他者を裁き，他者との関係を断ち切っていく判断のしかたであって，他者理解への途を閉ざすと同時に，関係豊富化への途をも閉ざし，自分自身がもっともっと豊かな人間になっていくという意味での自己豊富化への途をも閉ざしてしまう判断のしかただ，ということになります。

もちろん，私たちは，先ほども言いましたように，常に評価的判断を下しながら生きているわけですし，評価的判断を下さないことにはそもそも生きていくことすらできないわけですから，評価的判断様式というのは私たちにとって非常に大切な，絶対に欠かせない判断のしかたなんです。ですから，私がここで言いたかったのは，評価的判断をしてはいけないということではなく，評価的判断というのはこれこれこのような問題をはらんでいるんですよ，ということと，だから，そういった判断のしかたにしがみついてばかりいるとこんなふうなとんでもないことになってしまうんですよといった，そういうことが言いたかったわけなんです。

そうしますと，当然，それ以外の判断のしかたはないのか，ということが次の問題になってきますけれども，それはもちろんあると私は思うんです。それが先ほど「事実的判断様式」という言葉で言っておいた判断のしかたなんですね。そこで，次に，「事実的判断様式」とはどういう判断のしかたなのかということについて説明したいと思うんですが，その場合もや

はり，先ほどから取り上げてきた例に即して説明していきたいと思います。

(2) 事実的判断様式

先ほどから取り上げてきた例といいますのは，例の「甘え」の問題ですね。何度も言いましたように，「私」は，あるろうの人の話を聞いて，「それは甘えだ」と感じてしまったというわけです。そういった感じ方がいいか悪いかということは横においておくとしまして，「私」がそのように感じたということ，そのこと自体は確かな事実なんです。それから，「それは甘えだ」と「私」が感じるような「何か」がその人の話のなかにあったということ，そのこともまた事実なわけです。なぜなら，「私」は，その人の話のなかの「何か」を「甘え」と感じたわけですから。要するに，あるろうの人の話のなかの「何か」を「私」が「甘え」と感じたということ，そのことは間違いなく事実なんです。まずはこの事実を事実として，しっかり押さえておくことが何より大切だと思うんです。

しかし，だからといって，「そんなの甘えだ！」と断定してしまったらもうおしまいなんですね。そう断定してしまったら「そんなのダメだ」「そんな人はダメなんだ」ということになってしまいますし，そうなったらもう，先ほどの，「評価的判断」に逆戻りですからね。

ですから，そこのところで「そんなの甘えだ！」と断定してしまわずに，「でも，ちょっと待てよ」と「待った」をかけてみるんです。つまり，「私」はあるろうの人の話のなかの「何か」を「甘え」と感じてしまったんだけど，でも，ちょっと待てよ，という形ですね。そうやって「待った」をかけるといいましょうか，判断をいったん止めてみるといいましょうか，判断をいったん留保してみるんですね。

そうすると，いったいどういうことになるのでしょうか。「私」が「甘え」と感じたその「何か」というのは何なのか。「甘え」と言ってしまっていいのだろうか。それとも他の何かなのだろうか。どうして「私」はその「何か」を「甘え」と感じてしまったんだろうか。「私」が「甘え」と感じ

たその「何か」がろうの人たちの話のなかに出てくるのはどうしてなんだろうか。――そういった疑問が次から次に出てくるのではないでしょうか。

そういった疑問に答えるためには，いったいどうすればいいのでしょうか。少なくとも，「そんなの甘えだ」という自分の考えや感じ方にしがみついてしまって，それを基準にして物事を裁断したり，他者を裁いたりするようなやり方では，絶対に答えられませんね。つまり，評価的判断様式にしがみついているかぎり，それは絶対に答えられない問題なんです。

ですから，その評価的判断というものをいったん棚上げしてみる。そして，相手の人の世界をそのものとして理解しようとしてみる。この場合，相手の人というのはろうの人たちなわけですから，ろうの人たちの世界をそのものとして理解しようとしてみる。そうすることを通してしか，先ほどの疑問には答えられないんですね。

そういった判断のしかたを私はさし当たり「事実的判断様式」という言葉で呼んでおきたいと先ほど言ったわけですが，その意味で，「事実的判断様式」というのは，他者の世界を理解することを通してしか決着のつけられない判断のしかたなんですね。ですから，「事実的判断様式」というものについてこれ以上お話しするためには，そのときの他者の世界，この場合の他者というのはろうの人たちなわけですから，ろうの人たちの世界をどのように理解するかということを抜きにしては，もうこれ以上前には進められないということになってきます。ですから，いったんここで話を横におきまして，次に，「ろうあ者の世界」ということについて話してみようと思います。

もちろん，最初にお断りしておきましたように，私がこれから話そうと思っておりますのは，わずか一回きり，90分ほどの話し合いを聞かせていただくなかで「私に見えてきたろうあ者像」なわけですから，まったく不充分な「ろうあ者像」でしかないと思いますし，きちんと整理された形で体系的にお話しするというわけにはとてもいかないと思います。その意味で，お配りしたレジュメには，「ろうあ者の内的世界点描」という見出しを

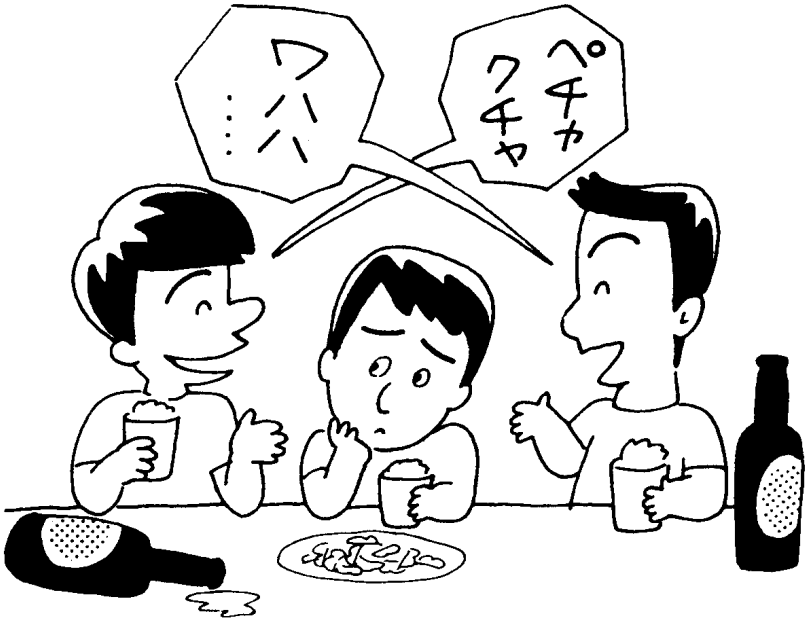
つけておいたわけです。

3. ろうあ者の内的世界点描

お配りした資料をごらん下さい。全体としては手書きで作られた資料のなかに，きれいな活字で印刷された資料が入っていると思いますが，これは全日本ろうあ連名と全国手話通訳問題研究会とが共同でお作りになった『アイ・ラブ・コミュニケーション』というパンフレットのなかの一節です。そこには，こんなことが書かれています。

「とくに社会に参加しようというときには，いろんな集まりに参加しなければなりません。ところが，ろうあ者は，PTAの会合，職場の会議，町内会の集まりから仕事帰りの喫茶店や“縄のれん”でのおしゃべりまで，いろんな集団のなかで話しあわれる内容が理解できないし，自分の考えもなかなか伝えられないのです。」

こういうふうに書かれていて，そのそばに，漫画ふうのさし絵がそえられています（下図参照）。



ここに書かれていることはしごく当然のことですし，まったくその通りなんだと思います。私自身，「本当にそうなんだなあ」と教えられたわけですが，それ以上に，私は，このさし絵がよくできていると思うんですね。ろうの人たちの内的な世界が本当によく表現されていると私は思うんです。そこで，まず，このさし絵のなかに，私たちはどんなことを読みとることができるのか，といったあたりから始めてみたいと思います。

(1)　スクランブル交差点の孤独

わかりきったことですが，ろうの人たちが抱えている問題というのは，主として，音の言葉が聞こえないということ，音の言葉で相手に自分の意思や感情を伝えられないということ，そういったところから生じてくるわけですね。しかし，考えてみたい問題は，そこからどんな問題が生じてくるのか，ということなんです。

言うまでもないことですが，問題は，まずもって，いろんな形の「不便さ」として現れてきます。思い通りにコミュニケーションできない不便さという形。たとえば，先ほど消防局の方が話しておられましたように，救急車を呼びたいときにどうするか，という問題。私たちだったら119番に電話すればいいわけですが，ろうの人たちはその電話が使えない。そこで電話ファックスを備えつけることにしました，と，そういう話を先ほど消防局の方はなさったわけですが，そういった形での「不便さ」という問題ですね。

そういった不便さが至るところにころがっていることとか，その不便さが単に「コミュニケーションができなくて不便だなあ」とか「困るなあ」というような程度のものではなく，文字どおり生命にかかわるほどのものなんだということ，私もこのパンフレットを読んで知ることができました。たとえば，救急車を呼ぼうとするときとか，火事の通報をしようとする場合がそうですし，病院でお医者さんと向かい合ったときの問題とか，赤ちゃんの泣き声が聞き取れないという問題だとか……。

ですから，私は，この「不便さ」という問題はそれほど深刻な問題ではないんだなどと言いたいわけでは決してないんですが，ただ，先ほどの『アイ・ラブ・コミュニケーション』のなかのさし絵を見ていますと，それとはまた違った意味で，非常に深刻な問題があるのではないかという気がしてくるんですね。

そこで＜資料２＞をごらんいただきたいんですが，これは，ある難聴の方がなさった話です。かなり重度の難聴なんだそうですけれども，この方は，聾学校ではなく，地域の小学校に通われたらしいんですね。その方が，小学校時代のことについて，こんなふうにお話しなさっているんです。

「机のね，いちばん前に座って先生の顔をジーッと見てても，何だかわからないから，他のことを考えてたりしてね。」

難聴のために先生の言葉が聞き取れないものだから，教室の前のほうの，先生にいちばん近い席に座って，先生の顔をジーッと見ていたというんですね。聞き取れない分，先生の表情や唇の動きを読みとろうとされていたんでしょうけれども，一生懸命そうやってても結局はついていけなくて，何が何だかわからなくなっていって，ふと気づいてみたらいつの間にか，頭のなかは他のことを考えていた，というんですね。

「ひとりぼっちだった？」と聞かれて，この方は，こんなふうに答えられています。

「うん。修学旅行に行っててもね，みんなは二人ずつ布団のなかに入ってワイワイやってるんだけど，私は一人で，寝る所もないから，こうやって泣いてたこともあります。淋しかったですね。」

この話を聞いたとき，私は，「この人，本当に淋しかったんだろうなあ」と思ってしまったんです。

人が孤独に感じるとき。孤独に感じて心の底から淋しさを感じるとき。それはどういうときなんでしょうか。たとえば，仲間と一緒に山などに登りまして，その仲間からはぐれてしまったときの淋しさ，というようなものがありますね。仲間からはぐれてしまって，まわりには誰もいない。困ってしまいますし，淋しくなってしまいます。そういった形で，まわりに誰もいないときに感じる孤独とか淋しさというものが確かにあります。

しかし，それとは比べようもないくらいに深い孤独や淋しさを感じてしまうときがあると私は思うんです。それはどんなときかといいますと，まわりに誰もいないときではなく，逆に，まわりに人がいっぱいいるときなのではないでしょうか。

まわりにはこんなにもたくさんの人がいるのに自分には心通わせるべき人が誰もいないと感じるときの孤独感。それは，もう，まわりに誰もいないときに感じる孤独や淋しさ，なんてものではないんです。それとは比べようもないくらいに耐え難い孤独ですし，どうしようもない淋しさなんです。

この難聴の人の話を聞きながら，私は，そういった類の孤独や淋しさをこの人に感じてしまったんですね。そして，それと同時に，私は，そのとき，ある歌手のことを思い出していたんです。尾崎豊という人なんですが，この人は高校時代に登校拒否をした経験とかもあって，結局は高校を中退した人らしいんですが，そういう経験がある人だからなんでしょうか，学校や社会のなかで押しつぶされそうになっている子どもの怒りやいらだちというような思いを，たたきつけるように歌っている人です。ライブ活動中心にやってきた人で，テレビにはほとんど出ない人なんだそうですが，その人のコンサートの様子がテレビで流されているのを一度だけ見て，その迫力に驚嘆させられたことがあります。

その人の初めの頃の歌なんですが，「スクランブリング・ロックン・ロール」というのがありましてね。そのなかに，正確な表現は忘れてしまいましたけれども，スクランブル交差点では誰とも心が通わないという主旨の

表現があるんです。

スクランブル交差点。まわりには人があふれていますね。そこにはにこやかに話を交わしている親子がいたり，楽しそうな恋人どうしがいたり，それぞれ自分の仕事をもって急ぎ足で歩いていく人たちがいたり……。そういう人間たちの渦のまっただなかで，俺は誰とも心が通わないという，そういう感じの歌なんです。

その歌を最初に聴いたとき，「すごい表現だ！」と思って強烈な印象を受けたことを覚えていますけれども，「淋しかったですね」という先ほどの難聴の方の言葉を聞きながら，私は，その歌のことを思い出していたんですね。

山のなかで仲間からはぐれてしまったとき，そういうときの孤独とか淋しさというものが確かにあると思います。しかし，そういうとき，人は大声を出して仲間を呼び求めるでしょうし，仲間のほうでもきっと，その人を探してくれているでしょう。ですから，たとえその時点では離れ離れになっていたとしても，心通わすべき人が誰もいないという意味での孤独や淋しさは味わわなくてもいいんですね。しかも，そうやってうまく仲間のところに帰れたらまた仲間と一緒になれるわけですし，無事に再会できたことを心から喜んでくれる仲間がいるわけですからね。

だけど，人間の渦のまっただなかで感じる孤独や淋しさというのは，もう，どうすることもできないものなんです。仲間からはぐれて，仲間と会えない淋しさ，なんてものではないんです。そもそも，その呼び求めるべき仲間なるものが世界中どこを探しても俺にはいないんだ，という淋しさなんですね。この淋しさ。そして，この孤独。「存在の孤独」とでも言いましょうか。それとも「実存の孤独」とでも言いましょうか。そんな言葉ででも言ってみたくなるような孤独や淋しさを，私は先ほどの人の言葉のなかに感じてしまったんですね。

そういった意味で，音が聞こえないというのは，単に音が聞こえなくて不便だとか，会話に参加できなくて困るというだけのことではなく，その

会話が行われる集団のなかでいつも，「自分はひとりぼっちなんだなあ」と心の底から感じていなければならない淋しさといいましょうか，そういった孤独と淋しさのなかに人を追い込んでしまうということでもあるんですね。その意味でも，私は，音が聞こえないというのは本当につらいことなんだろうなあと思うんですが，どうでしょうか。

同じような例をもうひとつご紹介します。

＜資料２＞の続きをごらん下さい。これは学校の授業参観に行かれたときのお母さんの経験なんですが，そのお母さんは，参観のときの授業が「道徳」だとすごく時間を長く感じてしまう，と言われるんです。他のお母さん方はにこにこ笑いながら聞いてるんだけど，って。

実際，そうなのかも知れませんね。たとえば，算数の授業で「２たす３はいくつ？」なんて授業を見せてもらってもあんまり面白くないでしょうけど，道徳の授業だったら先生も工夫して面白い話をなさったりするでしょうから，他のお母さん方はにこにこ笑いながら授業を見ていらっしゃる，ということなんでしょうね。だけど，このお母さんにとっては，その道徳の授業が一番つらいというんです。

どうしてかといいますと，「先生が黒板に字を二つほど書いて説明するんだけど，黒板に字を二つほど書いてね……」。たとえば「勇気」とか「優しさ」とか，その日の授業のテーマになるような言葉を先生が黒板に書かれるんでしょうね。そうしておいて，後は全部お話。先生がお話しされて，子どもに質問されて，それに子どもが答えたりして，まわりのお母さんたちはそれを見てみんな笑ってるのに，自分だけはボーッとしている感じで，途中で帰ってしまいました，と，こういう話です。

この方が途中で帰ってしまわれたのは，「授業を聞いててもどうせわからないんだから，このままここにいてもしかたがないや」とか，「こんなところにいてもいるだけ損だわ」とか，「早く帰ってお洗濯でもしましょ」とか，そういうことでは絶対になかったと思うんです。そんなことでは絶対になくて，先生も子どももまわりのお母さんたちも，みんな一緒になってにこ

にこ笑っているのに，自分だけがそのなかに入れなくて，「ああ，自分だけがひとりぼっちなんだなあ」というような気持ちになって，いたたまれなくなって帰っていかれたに違いないと思うんです。まさしく「スクランブル交差点の孤独」そのものですよね。この状況が先ほどの難聴の方の場合とまったく同じだということはもう，説明するまでもないですよね。

同じく学校の授業参観のときの話ですが，さらにこんな話もあります。

＜資料２＞の続きをごらん下さい。

この方は，国語とか算数だったらだいたい何をやってるかわかるんだけど，と言われます。たとえば，国語だったら教科書がありますし，算数だったら先生が「２＋３＝５」などと黒板に書かれたりするでしょうから授業でやってることがだいたいわかる，ということなんでしょうね。だけど，道徳の授業はさっぱりわからないものだから，途中で帰ってしまったというんですね。そしたら，後で，「○○さんのお母さんは途中で帰ってしまったけど，あれはいけないね」って言われたというんです。

先生の悪口を言うためにこんなことを言うつもりではないんですが，先生という仕事についていますと，つい，親たる者，子どもの教育に熱心であるのが当たり前，参観日には当然出席すべきである，なんてふうに考えがちになってしまいます。ところが，親の側としてみれば，参観日に出席するということは，一日四千円か五千円のパート収入を棒にふらなければならないということであるのかも知れない。ところが，親たる者，子どもの教育に熱心であるのが当たり前，参観日には当然出席すべきであると信じて疑わない先生が仮にいらっしゃったとしたら，そんなことには思いも及ばないで，「参観日に欠席するなんて，子どもの教育に無関心な，とんでもない親だ」ということになってしまうかも知れない。

仮にそんな先生がいらっしゃったとしたら，こんなふうに言われるのではないでしょうか。「親たる者，子どもの教育に関心をもつのが当たり前。当然，参観日には出席すべきである。ところがね」って。「一番きてほしいお母さんに限ってきてくれないんですよね」って。「いつもきてくれるお母

さんたちというのは，もともと教育熱心な方たちなんだから，特にきて下さらなくてもいいんです。いつもきて下さらないお母さんたちこそ，一番きてほしい人たちなんです。ところが，そんなお母さんに限ってきて下さらないんですよね」って，そんなふうに言われるかも知れませんね。ところが，そのめったにきてくれないお母さんが今日は珍しくきてくれてるなと思ってたら，なんと，途中で帰っていっちゃった。「あれだからねえ」と，こういうふうに後で言われたという話です。

いささかオーバーに脚色してしまったかも知れませんけど，それはともかくとして，このお母さんが途中で帰っていかれたときの気持ちたるや，とてもみじめな気持ちだったでしょうし，いたたまれない気持ちだったんでしょうけれども，そんなことには思いも及ばない先生や他のお母さんたちは，「あれだからねえ」とか，「あれじゃいけないよねえ」というふうに，非難のまなざしを向けられたというんですね。そうしますと，そのときのこのお母さんのつらさというのは，なんと，四重のものになっていたと言っていいのではないでしょうか。

まず第一に，授業の内容がまったく理解できないというつらさがありますね。これが先ほど言った「不便さ」の問題だということ，それはもう言うまでもありませんよね。しかし，問題は，それで終わりではないんです。それに加えて，さらに，まわりのお母さんたちが皆にこにこしているそのなかで，自分だけが取り残されたようにボーッとしているつらさというのが加わってきます。他のみんなも自分と同じようにわからなくて，みんながボーッとしているというんだったらさほどつらく感じなくてもすむところを，他のみんながにこにこしているそのなかで，自分だけがボーッとしていなければならないという状態。これこそ，まさしく，先ほどから言ってきた，「スクランブル交差点の孤独」そのものですよね。

しかし，それだけでもないんです。さらに加えて，そのうえに，そういった二重のつらさが誰にもわかってもらえないという，第三のつらさが加わってきます。自分のつらい思いを誰かがわかってくれていると思えるときは，

そのつらさも，ずいぶん軽くなるものだと思います。ところが，自分のつらさは誰にもわかってもらえないんだというときは，そのつらさは何倍にも耐え難いものになってしまいます。そういった状態もまた，先ほどから「スクランブル交差点の孤独」とか「実存の孤独」と言ってきたような状況のなかに，ますます人を追い込んでいくと思うんです。

しかし，それでもまだ，終わりではないんです。それに加えて，さらに，そういった状況におかれたこの人に向けられたまわりの人たちのまなざしが，なんと，「あれだからねえ」とか，「あれじゃいけないよねえ」という，非難のまなざしだったというわけです。そのこともまた，単に非難されることがつらくて悔しいというだけではなく，自分のことはやっぱり誰にもわかってもらえないんだという思いをますます強めさせていくでしょうし，そのことがまた，「スクランブル交差点の孤独」とか「実存の孤独」というような言葉で言ってきた，心の深いところで感じる絶望的な孤独や淋しさのなかに，ますますこの人を追い込んでいくことになるのではないでしょうか。

以上，ろうの人たちの話をいくつか紹介してきましたけれども，こういうふうに考えてみますと，音によるコミュニケーションに参加できないということがどれほど大変なことか，あらためてよくわかるような気がします。それがどんなに不便なことかということはもちろんのこととして，問題はそれだけではなく，「スクランブル交差点の孤独」とか「実存の孤独」というような，心の深いところで感じる底知れない孤独や淋しさのなかに人を追い込んでしまうという，そういう問題でもあるのではないかと私は思うんです。

私たちが日頃そういった孤独や淋しさを感じないで生活していけるのは，私たちがりっぱな人間だからでもなければ豊かな人格の持ち主だからでもなく，単に私たちが他者とのコミュニケーションを保証されているという，その一点にかかっているんだと私は思うんです。その意味で，対話というものが人間の精神生活にとってどんなに大事なものかということを痛切に

感じてしまいますし，そういうふうに考えてみれば，また，対話の障害という，ろうの人たちが抱えている問題の深刻さも，あらためてわかってくるような気がします。ろうの人たちの問題を理解するためにも，また，私たち自身のことを理解するためにも，「対話の人間学」とでもいうようなものを考えてみることが必要なのではないかと思ったりもします。そういうことに気づかせていただいただけでも，話を聞かせていただいたことに，あらためて感謝してしまう次第です。

以上が「ろうあ者の内的世界点描・その1」です。ここで言おうとしてきましたのは「スクランブル交差点の孤独」とか「実存の孤独」というようなことだったわけですが，そういったことを考えながら，もう一度，先ほどの『アイ・ラブ・コミュニケーション』のなかのさし絵をごらん下さいませんでしょうか。いままで話してきましたようなろうの人たちの内的世界が本当によく表現されているように私には思われるんですが，いかがでしょうか。それから，やはり『アイ・ラブ・コミュニケーション』に，「家にいるよりも，ろうあ者同志で行く喫茶店のほうが楽しい」という，ろうの人の言葉が紹介されているんですが，その言葉の意味の深刻さも，あらためてよくわかってくるような気がします。

次の問題に進む前に，二点ほど付け加えさせて下さい。

まず，「親たる者，子どもの教育に関心をもつのが当たり前」という考え方，そして，そういった考え方に照らして「参観日にこない親，きても途中で帰るような親はダメな親だ」というように考える考え方が，まさしく，先ほど言った，「評価的判断」そのものだということは明らかですよね。

そういった考え方に凝り固まった人には，途中で帰ってしまうのは子どもの教育に対する無関心の表れとしか見えないでしょうし，そんな親はダメな親だとしか見えないでしょうね。そんな人には，そういった自分の考えをちょっとの間棚上げして，「あのお母さんは途中で帰っていっちゃったけど，あれはいったい何だったんだろう？」と考えてみようとする開かれた心はもてないでしょうし，ましてや，そのときのお母さんのいたたまれ

ない思いに気づくなんてことは到底できないでしょうね。ですから，この例について考えてみるだけでも明らかなように，評価的判断にしがみついて他者を裁いてばかりいることが，そうやって裁かれる側にとってはどんなに残酷なことか，よくわかるような気がするんです。

それともうひとつ。先ほどからの話のなかで先生のことを随分ひどく言ってしまいましたけれども，それはそのときのお母さんの気持ちをできるだけわかりやすくしようと思ってのことでありまして，そのために先生には思いっきり悪者になってもらったわけですから，その点，どうかご了解下さいますようにお願いします。この先生，なんてひどいんでしょうね，なんてことを言いたかったわけではないということ，是非ご理解下さいますようにお願いします。

(2) 対人関係状況におけるあいまいさ

二番目の問題に移ります。

＜資料３＞をごらん下さい。これは聾学校を卒業された方の話なんですが，卒業するとき，先生からこんなアドバイスを受けたという話です。

「学校の卒業前に注意されたことがあります。学校のときはクチャクチャ食べてもいいけど，卒業したら上品に食べるように言われました。」

聾学校の先生は，卒業していく生徒さんたちのことを心配しておっしゃったんでしょうね。「いいですか，皆さん」って。健聴者の世界では，食事のとき，クチャクチャ音をさせるのはとても品のないことだといって嫌がられるんですよ。だからみんなも気をつけるようにね，って。学校にいる間はかまわないけど，卒業したらよくよく気をつけるんですよ，って。

この話は，私にとって，実は，聞かせてもらった90分ほどの話し合いのなかで，いちばん衝撃的な話だったんです。実際，この話を聞いたときには，もう，私は，本当に驚いてしまったんですよね。

考えてみますと，ろうの人というのは，音が聞こえないんですよね。だから，ろうの人自身としては音のことが気になるはずがないし，音のことなんて，本来はどうでもいいことであるはずなんですよね。そもそも，音のことを気にしようとしても気にすることができないのがろうの人たちなんですからね。それなのに，実際には，自分がたてる音のことを気にしなければならなくなっている。何という矛盾なんでしょう。

そういった音のことが気になってしかたがないのは誰かというと，言うまでもなく，私たち健聴者なんです。実際，そう言っている私自身，とても音に弱い人間で，子どもが家のなかでドシンドシンとやったりしようものなら，「何というやつだ，この野郎！」なんてふうに思ってしまいます。

しかし，私に限らず，一般的に言って，健聴者の世界というのは，音のルールにとてもやかましい世界なんですね。ドアをバターンと閉めた。もう，それだけで，「何という無神経なやつだ！」ということになりますし，眠っている人の枕元を足音たてて歩いたりしようものなら，「お前，それでも人間か?!」なんてことになってしまいます。

実際，音というのは，本当に迷惑だと思います。たとえば，夜通し走ったタクシーの運転手さんが昼間の間眠っているとしますね。そうすると，隣の小さな物音がとてもたまらなく思えることがあるでしょうし，夜遅くまで勉強している受験生には，近所の親子の何でもないやりとりが，無神経な騒音に聞こえることだってあるでしょうね。

そういった形で，健聴者の世界というのは，音のルールに非常にやかましい世界なんです。その世界にろうの人たちも生きているという現実があります。この現実。そして，この関係性。音のルールにやかましい健聴者と，まさしくその音を聞くことができないろうの人たちが一緒に生活しているという現実。しかも，健聴者のほうが圧倒的に大多数であるという関係性。そういった関係性こそ，ろうの人たちが生きることを，ますますしんどくさせているのではないでしょうか。

仮に，そういった関係がなかったとしてみますね。そうすると，どうなっ

ていたでしょうか。たとえば，仮にですね，ある地域に住んでいる人たち全員がろうの人で，まわりの地域との交渉もまったくなかったとしてみますね。あくまでも「仮に」の話ですが，仮にそういう地域があったとしたら，どうなっていたでしょうか。

まず，そこでは，音のことを気にする人なんて一人もいなかったでしょうし，音に関するルールなんてものもなかったはずですよね。そうしますと，そこに住んでいるろうの人たちは，音のことを気にする必要がまったくないわけですから，いまの現実の状況と比べると，はるかに気兼ねなく生活できていたはずだと思うんです。それだけでも，そこに住んでいるろうの人たちの生活は，ずいぶん楽なものになっていたのではないでしょうか。

ところが，現実には，そんな地域はどこにもない。現実のろうの人たちは音のルールにやかましい健聴者と一緒に生活していて，しかも健聴者のほうが圧倒的に大多数。そういった現実があるからこそ，音を聞くことのできないろうの人たちが，まさしく，その，自分の耳で聞くことのできない音のことを気にしながら生活しなければならないという，矛盾きわまりない状況が生まれてしまっている。

音のルールというのは，本来，健聴者による，健聴者のためのルールなんです。ところが，現実には，そのルールにろうの人たちも従ってもらっている。乱暴な言い方をしますと，私たち健聴者のルールをろうの人たちにも押しつけている。そういう関係になっていると私は思うんです。

いま私は「押しつけている」という言葉を使ったわけですが，以前，あるところでその言葉を使って，大変な批判を受けたことがあります。「押しつけてる」だなんて，そんなことはありませんよと，大変な反発を受けたわけなんですが，そのことについては後でもう一度ふれてみることにして，さし当たり，ここでは，「押しつけ」かどうかは別として，音のルールというのはもともと健聴者による健聴者のためのルールなんだということ，ろうの人たちにとっては本来どうでもいいはずのものだということ，しかも，

それなのに，ろうの人たちもこのルールに従わなければならなくなっているということ，ところが，ろうの人たちというのは，まさしく，その，音を聞くことができない人たちなんだということ，そういった関係になっているということに充分気づいておくことが非常に大切だと思うんです。

そうすると，大変な問題に気づくことができるんじゃないかと思うんですね。どんな問題かといいますと，そもそも音を聞くことができない人たちが，いったいどうやれば音のルールを守っていくことができるのか，という問題。あるいは，その人が音のルールに違反したとき，自分が音のルールに違反したことに，その人は，いったいどうやれば気づくことができるのか，という問題。

そういった問題に関しては，一般的に言えば，こんな形になっているのではないでしょうか。先ほどの食事のことを例にとりますと，まず，ろうの人が，仲間と一緒に，レストランで食事しているとしますね。雰囲気はいいし，料理はおいしいし，楽しく食事しているその最中に，ふと気づいてみたら隣のテーブルの人がいやそうな顔をしている。「あれっ，どうしたんだろう。私が変な音でもたてたのかしら？」

こんなことは，日常生活のなかで，他にもいっぱいあると思うんです。たとえば，町なかのアパートにろうの人が住んでいたとして，玄関を出てみたら隣の人の姿が見えます。何だか怒っているみたい。マユの間にしわを寄せて，いかにも不機嫌そうな顔。どうしたんだろう。もしかして，私が迷惑なことでもしたのかしら。テレビの音が大きいんだろうか。子どもが騒いでうるさいんだろうか。ドアの音のせいだろうか。それとも他の何かだろうか。……

ここには，問題が二つあるように思います。第一は，ろうの人は常に音のことに神経をとがらせるようになってしまいがちなのではないか，という問題。第二は，ろうの人は常に他の人の表情を読みとる形で自分のことを理解しようとしがちになるのではないか，という問題。

まず，第一の問題について言いますと，私たち健聴者は自分の耳で音を

聞くことができますから，自分が音のことで迷惑をかけているかどうか，その気になればすぐ確かめることができますね。「うん，テレビの音が大きすぎるな」とか，「何しろ，子どもが騒いでいたからな」とか。ですから，そう気づいたときにテレビの音を小さくしたり，「うるさくすれば隣に迷惑よ」と言って子どもに注意すればいいわけで，だからこそ私たち健聴者は，音のことにとりたてて神経をとがらせていなくても生活していけるんだと思うんです。

ところが，ろうの人は音が聞こえないために，自分が音のことで迷惑をかけているかどうか，自分の耳で確かめることができませんから，迷惑をかけまいと思えば，私たち健聴者には思いも及ばないくらい，迷惑な音をたてないように，たてないようにと，絶えず神経をとがらせていなければならなくなってしまうのではないでしょうか。しかも，まわりの人の迷惑そうな顔，というより，迷惑そうに見える顔を見て，自分が音のことで迷惑をかけたんじゃないかということに，すごく気を使ってしまう。私たち健聴者だったらそこのところを自分の耳で確かめることができますから大して神経を使わなくてすむところを，ろうの人は自分の耳で確かめることができませんから，「迷惑かけてるんじゃないだろうか，どうだろうか」「よくなかったのはあれだろうか，これだろうか」という形で，すごーく気を使ってしまうのではないでしょうか。

だから，私たち健聴者はまさしく音を聞くことができるからこそ自分がたてる音にさほど気を使わなくても生活できているのに対して，ろうの人たちは音を聞くことができないからこそかえって自分がたてる音のことに神経をとがらせていなければならないという，まったく皮肉なことが起こっているのではないでしょうか。そして，その結果，一方には音に無神経な健聴者がいて，他方には音に神経質なろうあ者がいるという，実に奇妙な現実が生まれてしまっているのではないでしょうか。

次に，二番目の問題は，自分がたてた音がまわりの人に迷惑をかけているかどうか，ろうの人はいったいどうやって確かめるんだろうかという問

題ですが，この問題に関しては，先ほどから言っていますように，まわりの人の表情を読み取る形で判断していることが多いのではないでしょうか。「あれっ，迷惑そうな顔。どうしてだろう。もしかして，私のせいではないだろうか」という形ですね。

そういった判断というのは，常に，「ではないだろうか」という形になっていますね。「私のせいではないだろうか」とか，「テレビの音のせいではないだろうか」というような形に。ということは，裏返して言えば，「そうではない」のかも知れませんよね。だから，そういった判断というのは常に，「私のせいではないだろうか。でも，そうではないのかも知れない」「テレビの音のせいではないだろうか。でも，そうではないのかも知れない」というような形になってしまって，常にあいまいなものになってしまうと思うんですね。

そもそも，表情というのはたいていの場合はあいまいなもので，とりようによってはどうにでもとれるということが多いと思うんです。そうすると，「迷惑そうな顔」と見えたのはもしかしたらそうではなかったのかも知れないわけですし，でも，迷惑かけてるんじゃないかという不安をもっているときには隣の人の何でもない顔が迷惑そうな顔に見えてしまうでしょうし，そんな気になってみればますますそう見えてくるでしょうし，だから自分が何か迷惑かけたのではなかろうかと思ってしまうでしょうし，でもそれは思い過ごしで，本当は自分のせいではないのかも知れないし，そうは言ってもやっぱり自分のせいかも知れないし，自分のせいだとすればテレビの音のせいかも知れないし，テレビの音のせいではなくてドアの音のせいかも知れないし，ドアの音のせいではなくて子どもがうるさいのかも知れないし，でもそうではないのかも知れないし，そもそも最初のところで迷惑そうな顔と思ったのが間違いで，自分の思い過ごしだったのかも知れないし，そうは言ってもやっぱりあの顔はトゲのある顔にしか見えなかったし……，といった具合で，どこまで行っても果てしない，「かも知れない」と「ではないかも知れない」の堂々めぐりになってしまいます。あ

らゆるものがあいまいで，そうであるようにも思え，そうでないようにも思えるという状況。一切の判断にあいまいさがつきまとってしまう状況。これはもう，たまらない状況ですよね。

ろうの人たちというのは，これほど極端ではないとしても，多かれ少なかれそういった「あいまいさ」のなかを生きていかなければならなくなっているのではないでしょうか。

聾学校を卒業するときのエピソードを語って下さった先ほどの方も，やはり同じようなことを話しておられました。＜資料３＞の最後のあたりをごらん下さい。それは，こんな話です。

「具体的に何が失礼だったのかわからないけど，通訳者の様子を見ていると，何だかこう，何か悪いことをしたみたいだ，という雰囲気になることはあります。」

これは必ずしも「音の迷惑」に関することではありませんけれども，だからこそ，かえって，私には，ろうの人たちが「音の迷惑」以外の場面でも「あいまいさ」の状況を生きなければならなくなっていることを物語っているように思えるんですね。

こういった状況を，私は，人と人との関係のなかで確信ある判断をもつことができない状況，一切の判断にあいまいさと疑念がつきまとってしまう状況，というような意味で，「対人関係状況におけるあいまいさの問題」と言っておこうと思うんです。そうしますと，ろうの人たちというのは，多かれ少なかれ，そういった，「対人関係状況におけるあいまいさ」のなかを生きていかなければならなくなっているのではないでしょうか。それもまた，とてもたまらない，しんどい状況だろうと私は思うんです。

どうしてろうの人たちはそういう状況のなかにおかれてしまうのでしょうか。それはもうわかりきったことでありまして，ろうの人たちが対話から疎外されてしまっているからなんですね。自分がたてる音を自分の耳で

確かめるという形での，自己との対話。それから，まわりの人たちとの対話。その両方が同時に疎外されているというところから先ほどのような状況は生まれてくるんだということ，それはもう明らかですよね。

一般的に言っても，対話というのは，人間の安定した精神生活にとって絶対に欠かせない，とても大切なものだと思うんです。私たちが安定した自己像をもって生活していけるのも，ただただ私たちが安定した対話ができているからなんですね。そう考えてみますと，ろうの人たちが抱えている対話の障害という問題は本当に深刻な問題なんだということが，あらためて痛切に感じられてしまいます。

ところが，そういった問題について，一般には，意外なくらいに気づかれていないのではないかという気がするんですね。といいますのも，私は，つい先日のことなんですが，ある本を読んでいたんです。そしたら，そのなかに，ろうの人たちのことについて書かれた文章があったんですね。はっきり言ってそれはとてもひどい文章でしたから，ここでそのまま紹介するのはためらわれてしまうんですが，思い切って紹介しますと，その本には，「つんぼは疑い深くて……」というような趣旨の言葉が書かれていたんです。

正直言って本当にひどい言葉だし，非常にいやらしい言葉だと思います。「つんぼ」という言葉そのもののいやらしさはもちろんのことなんですが，問題は，どうも，それだけではないような気がするんです。

「疑い深い」という言葉がふさわしいかどうかということを別にすれば，ろうの人たちが疑い深い心境になりがちだという現実は，確かにあるんじゃないかと思います。というより，疑い深くならざるをえないのがろうの人たちがおかれた状況なんだと私は思うんです。そういった状況こそ，まさしく，「対人関係状況におけるあいまいさ」という言葉で私が言おうとしてきた状況なんですね。そういった「あいまいさ」ゆえに，ろうの人たちは，まわりの人たちの態度について，「迷惑がってるんじゃないだろうか」とか，「迷惑がってるわけではないかも知れない」とか，「いやいや，やっぱり迷惑がってるんだ」といった具合に，あれやこれやと思い悩まなければなら

なくなってしまうんですね。その意味で言えば，疑い深くならざるをえないのがろうの人たちがおかれた状況なんだと私は思うんです。

そういった状況がどんなにつらくてしんどい状況なのかということへの理解がまったくないということ，そして，そういった状況のなかで生きなければならないろうの人たちのつらさ，しんどさへの共感的理解がまったくないということ，そのことが，先ほどの言葉をいやらしく響かせる，ひとつの原因ではないかと私は思うんです。

しかも，ろうの人たちは，まわりの人たちの不愉快そうに見える表情を見たとき，「自分が何かよくないことをしたのではないだろうか」というように，すぐ自分のほうに疑いの目を向けてしまう。その意味で，ろうの人たちは，他の人を疑う以上に，自分自身に疑いの目を向けてしまうところがあるのではないか。それもまた，大変しんどいことだろうと私は思うんです。そういったことへの理解がないこと，そのこともまた，先ほどの言葉をいやらしく響かせる，もうひとつの理由のような気がします。

しかし，先ほどの言葉をいやらしく響かせる最大の理由は，たとえろうの人たちが疑い深くなりがちだとしても，それは決してろうの人たちの人格や人間性の問題なのではなく，対話が閉ざされた状況というものが人間を疑い深くさせるのだということ，だから，先ほどのような言葉を語ったその人自身，対話が閉ざされるような状況におかれればあっという間に疑い深くなってしまうはずだということ，そういったことへの理解がまったくないということ，そのあたりに最大の問題はあると私は思います。

この最後の問題についてもう少し話してみたいんですが，たとえば，いまここで私が話しているとき，先ほどからずっと，こちらの方が，皆さんのほうに向かって，手話通訳して下さってますよね。その場合，仮に皆さん全員がろうの人たちだったとして，私の話を直接聞いて下さってるんじゃなくて，こちらの方の手話通訳を通して聞いて下さってるんだと仮定してみますね。そうすると，私は，こちらの方の手話通訳を介するという形で，間接的にしか皆さんと対話できない関係におかれてしまいます。そうしま

すと，もう，それだけで，私は不安になってしまうと思うんです。そして，「この人の通訳，大丈夫なんだろうか」とか，「この人，ちゃんと通訳してくれてるんだろうか」というふうに，通訳して下さってるこの方に対して，疑い深くなってしまうと思うんです。

そういった関係のなかで，仮に，皆さんのなかの何人かが変な顔をされたとしますね。あるいは，変な顔をされたように私が思ったとしますね。そうしますと，もう，私は，それだけで，「俺，何か変なこと言ったかな」と自分を疑ってしまうでしょうし，そんなにまずいことを言ったつもりはないということになりますと，「この人が変な通訳をやったんじゃないかいな」というように，こちらの手話通訳の方を疑うでしょうし，あるいはまた，「変な顔をしたと思ったのは自分の思い過ごしかな」というように，自分の感覚を疑ったりもするでしょうし，そういった形で，あっという間に「対人関係状況におけるあいまいさ」のなかに入り込んでしまうと思うんですね。そして，自分を疑い，こちらの方を疑い，というように，誠に疑い深い人間になってしまうと思うんです。そういった調子で，ほんのちょっとだけ対話が間接的になっただけでもこんなに疑い深くなってしまうのが人間だと私は思うんです。

同じようなことなんですが，もうひとつだけ私の体験を話させていただきますと，私がろうの人たちの話し合いに出席させてもらったときのことなんですが，その場にいたのは7～8名のろうの人たちと手話通訳の人で，皆さん手話で話されるなかに，まったく手話のわからない私がひとりだけ，ぽつんと入っているという形だったんですね。

話し合いが始まってしばらくすると遅れてきた人が入ってきて，着席して，隣の人の肩をポンポンとたたくんです。そして，私のほうを指さしながら，何やら手話で話されています。すると，話しかけられたほうの人がこれまた手話で何やら話されて，遅れてきた人が「ふーん」といった様子でうなずいて，二人して私のほうを見て，それからお互いに顔を見合わせて，笑い合っておられました。

そのやりとりを見ても私は別段いやな気持ちにはならなかったんですが，それはどうしてかといいますと，話し合いが始まってすぐ，この人はこれこれこういう人で，こういうわけで出席してもらっているんだというふうに，紹介してもらっていたからなんですね。だから，私は，そのとき，あの二人はきっと，「あの人，何者？」「これこれこういう人らしいよ」「手話できるの？」「どうもできないらしいよ」というような会話をなさっているんだろうなと想像できて，不安にもならずに見ていることができたんですね。

しかし，それがそういう場ではなく，知らない人ばかりが集まったような場所，たとえば病院の待合室のような場所だったとすれば，私は，間違いなく，いやな気持ちになっていたと思うんです。「あの二人，何話してるんだろ。俺のことを話してるみたい。悪口言ってるんじゃないかいな。いやな感じ」というような気持ちになって，その二人のほうに疑いの目を向けてしまったと思うんですね。

そうしますと，そのときなぜ私が疑い深くなってしまったのか，ということが問題になってくるわけなんですが，いつもはそれほど疑い深くない私がそういう場におかれたとたんに疑い深くなってしまうわけですから，私の人格や人間性が問題なのではなく，その場のあり方こそが問題なんだ，ということになりますね。つまり，対話の流れが遮断されてしまっているという，その場の状況こそが問題なんですよね。

考えてみますと，そのとき私がおかれていた状況は，ろうの人たちが日常的におかれている状況とまったく同じだったと言っていいと思うんです。ろうの人たちは，日頃，まわりで交わされる「音の言葉による対話」に参加できない位置におかれています。そのときの私は，まわりで交わされる「手話による対話」に参加できない位置におかれていました。いずれにしても，まわりで交わされる対話に参加できない位置におかれていたという点では，共通していると思うんです。まさしくそのような位置におかれるということ，そのことこそ，人を疑い深くさせるものなんだと私は思うんで

す。そういう位置におかれれば誰だって疑い深くなってしまうものだし，それが人間というものなんだと私は思うんですね。

先ほど紹介した本の中の言葉がいやらしく響く最大の理由は，そういったことへの理解がまったくないまま，疑い深いのはろうの人たちの人格や人間性の欠陥のためなんだ，みたいな考え方をにおわせているところにあるのではないでしょうか。だからこそ，その言葉が，「だからあいつらはどうしようもない人間たちなんだ」みたいに響いてしまって，ろうの人たちに対する人間的侮蔑感をにおわせることになってしまうんでしょうし，「自分たちはそういう疑い深さのない，りっぱな人間なんだ」みたいな尊大な思いあがりをにおわせることになってしまうのではないでしょうか。そう言っているその人自身，対話が閉ざされるような状況におかれればあっという間に疑い深くなってしまうんだということにまったく気づかない手前勝手さも，私はその言葉のなかに感じてしまいます。

以上，「対人関係状況におけるあいまいさ」ということについて話して参りましたけれども，こういうふうに話しながら，私は，「対人関係状況におけるあいまいさ」というのは，対話が閉ざされた状況では直ちに出てくる問題なんだということ，だから，ろうの人たちに限らず，対話が閉ざされるような状況におかれれば誰しもがそうなってしまうんだということ，そういったことを理解しておくことが，ろうの人たちに対して，「あの人たちは疑い深くてどうしようもない人間たちだ」などといった類の人間的侮蔑感をもたないようにするためにも，また，ろうの人たちの生きづらさに対する共感的理解に一歩近づくためにも，本当に大切なことではないのかなあと，あらためて思ってしまいます。

(3)　フラストレーションの蓄積

次に，三番目の問題ですが，時間が足りなくなってしまいそうですので，大急ぎで話していきます。

＜資料４＞をごらん下さい。

これはあるろうの人の話なんですが，その人は借家に住んでいたんだけど，その借家を解体して建てかえるからすぐ出ていってくれって大家さんから言われて，非常に困ったというんですね。契約書では「引っ越してくれ」ということは6カ月前には言わなければならないことになっているんだから「すぐ出ていってくれ」とは言えないはずなのに，大家さんは「すぐ出ていってくれ」と言う。それで，手話通訳の人も一緒に行ってもらっていろいろ交渉したんだけど，結局すぐ引っ越さなければならないということになって，とても困ったというんですね。

で，一緒に行ってくれた通訳の人は，最初の間は私のほうについていてくれたんだけど，いつの間にか大家さんの代弁をするようになって，「やっぱり引っ越したほうがいいよ」なんてことを言うようになって……。通訳の人は私のために行ってくれたんだから，私の味方になってくれとは言わないけど，相手の側につくのだけはやめてほしい。私は，そのときから，通訳者に対して不信感をもつようになりました。その通訳者に対して，というのではなく，およそ「通訳者なるもの」に対して不信感をもつようになりました，と，こういう話なんですが，こんな話を聞くとすぐ，「何というひどい通訳者なんだ」と考えてしまいそうになる人がもしかしたらいらっしゃるかも知れませんけど，さし当たり，そんな決めつけはしないほうがいいと私は思います。その通訳の人がひどい人だったかどうかを判断するためには，もっともっと詳しい情報が必要だと思うんです。

しかし，その通訳の人がひどい人だったかどうかという問題より，はるかに大事な問題があると私は思うんです。といいますのも，この話は，手話通訳というものの難しさ，単なる手話通訳の技術上の難しさというのではなく，通訳者を介して作られる三者関係というものの難しさを教えてくれているように私には思えるんですね。

そういうわけで，この手話通訳の人がひどい人だったかどうか，なんて問題は横においときまして，むしろ，私は，先ほどの話の続きの部分を見ていただきたいんですね。この方はこんなふうにおっしゃってるんです。

「大変いい経験をしたけど，二度と経験したくない。この経験は忘れない。もし健聴者の人が私と同じ経験をしたらもっとひどく文句っていうか，苦情を言うんだろうけど，私たちは聞こえないし，コミュニケーションが難しいからなかなか直接言えないし，不便を感じています。」

健聴者だったらもっともっと文句が言えるだろうし，もっと激しく苦情が言えるんだろうけど，私たちは直接言えないし，というこの人の言葉。どう言ったらいいんでしょうか，私が高校生だった頃，『徒然草』という書物のなかで「もの言わぬは腹ふくるるわざなり」なんて言葉を習った記憶がありますけれども，言いたいことが言えないもどかしさといいましょうか，特に喜怒哀楽の感情，とりわけ怒りの感情を表現できないもどかしさといいましょうか，そういった思いがこの言葉では語られているように，私には思えるんですね。

そういった状況が続いていけば，当然，言いたいことが言えない怒りとなっていくでしょうし，そうした怒りが一触即発で爆発しかねないほど蓄積されていくということにもなりかねない。と同時に，そうした怒りは，伝えようとしてもどうせ伝わりっこないんだという絶望感にもなっていくのではないでしょうか。その意味で，ろうの人たちというのは，そういった怒りや絶望感がないまぜになった状態で心のなかに渦巻くというような状況におかれがちなのではないでしょうか。

そうしますと，問題は，なぜ言いたいことが伝わらないのか，特に怒りのような感情が伝わっていかないのはなぜなのか，ということになってくるわけですが，私は，必ずしも，手話通訳者のせいとばかりは言えないような気がするんです。

もちろん，手話通訳者が通訳技術の面で不充分だとか，ろうあ者理解が不充分だというようなことがあって，そのためにろうの人たちの言いたいことが充分に伝わっていかないというような場合もないわけではないだろうとは思います。しかし，必ずしもそれだけではないのではないか。とり

わけ怒りのような激しい感情は，たとえ手話通訳者が技術的に優れていても，あるいは，ろうあ者理解が充分だったとしても，通訳者を介して作られる三者関係のなかでは充分に表現しつくすことはできにくいし，相手にもなかなか充分には伝わっていかないと思うんです。

たとえば，「そちらの資料をとって下さい」というようなことでしたら，通訳者をはさんだ三者関係のなかでも充分に表現されるし，相手にも充分伝わっていくことが可能でしょうけれども，怒りのような感情だとそうはいかない。怒りというのは，腹の底からの怒りをもって，「怒ってるんだぞ！」「許さないぞ，お前！」というふうに怒りの声をあげることを通してしか充分に表現することはできないし，相手にも充分には伝わっていかないと思うんです。ところが，実際には通訳者を間にはさむ形で会話は行われているわけですから，怒りの表現も間接的にならざるをえない。当然，怒りの表現は不完全にしかならないし，相手にも充分な形では伝わっていかないということになる。

そういうわけで，ろうの人たちの心のなかには表現されない感情や伝えられない感情がたまっていって，表現すること，伝えることができないもどかしさやいらだちとなっていく。あるいは，怒りや絶望感となっていく。そして，そういった感情がないまぜになって心のなかにたまっていき，フラストレーションがどんどん蓄積されていく。そういった面が常にあるのではないかと私は思うんです。

同じような例をもうひとつご紹介したいと思います。これは手話通訳者にとっては何ともはや聞きづらい話だろうとは思うんですが，その話に対して，「えーっ，ろうの人たちって，そんなことを言ってるの?!」とか，「そんなことを言われたんじゃ，たまんないよねー」というような受けとめ方はしないという約束をしていただいたうえでご紹介したいと思うんですが。もちろん，そういった受けとめ方をなさるような方はいらっしゃらないだろうとは思いますけど。

＜資料４＞の続きをごらん下さい。こういう話です。

「通訳頼んでも，不満や問題を通訳者に話しても，問題は解決されないんじゃないかしら。市役所に行っても，力関係からしたら手話サークルの人たちより，市役所のほうが上でしょ。職場でも，不満があっても，結局立場が上の人には強くは言えない。手話通訳者も同じで，強く言えないのが実際じゃないか。だから，学校の問題にしても，職場の問題にしても，市に対する要望にしても，私たちも手話サークルの通訳者の人たちも力がないから，不満はたくさんあっても，言ってみたって無駄じゃないか。」

と，こういう話がありまして，それから，

「だから，通訳の人は，いやなことを通訳しなければならないとき，ろうあ者の切実な気持ちを通訳するんではなくて，切実な気持ちを伝えなくてはならないときに，それを自分なりに考え直して，やさしく言い直してしまう。きれいな言葉で言い直してしまうんじゃないか。病気とかで通訳を頼んだとき，度々そういうことがありました。私の言ってるとおりに相手に伝わらなくて，やさしく，きれいになりすぎて，相手に伝えてもらえなかったことが多かったですね。」

この話は，先ほど紹介した引っ越しの件に関する話と比べますと，劇的な要素ははるかに少なくなっているように思います。といいますのも，先ほどの例では怒りという激しい感情が伝えられないもどかしさやいらだちのようなものが語られていましたけれども，この話ではそうではなく，もっと一般的な形での，表現したいことが表現できないもどかしさとか，伝えたいことが伝えられないいらだちのようなものが語られていると思うんですね。それだけに，かえって，この話は，そういったもどかしさやいらだちというものが，単に怒りや腹立ちというような激しい感情を表現したい，

伝えたいというときだけではなく，もっともっと広い範囲で起こっているんじゃないかということを教えてくれているように思えるんですね。

それでは，そういった問題に対しては，いったいどうすればいいのでしょうか。先ほども言いましたように，そういった問題は，少なくとも一部には手話通訳者の通訳技術上の問題とか，ろうあ者理解の問題というようなところから起こってくるわけでしょうから，手話通訳者のほうで通訳技術を向上させる努力をしたり，ろうあ者理解を深める努力をすることがもちろん必要なんでしょうけれども，必ずしもそれだけですべてが解決できるわけではないように私には思えるんですね。といいますのも，これも繰り返しになってしまいますが，そういった問題というのは，通訳者を介して作られる三者関係という，ろうの人たちの対話の場の構造そのものから生まれてくる問題でもあると思われるからなんですね。

たとえば，先ほどの人の話のなかで，私たちの切実な気持ちを伝えないで通訳者が言い直してしまう，やさしい言葉，やわらかい言葉に置き換えて伝えてしまう，というようなことが言われていましたけれども，その点に関しましても，通訳者のほうがろうの人の激しい言葉をそのまま伝えることをためらってしまって，やさしい言葉，やわらかい言葉に意図的に言い換えてしまって，その結果コミュニケーションが不満足なものになるというようなケースもないわけではないでしょうけれども，それと同時に，そもそも通訳というのは一種の言い換えなんだ，という面もあるのではないかと思うんです。どういうことかといいますと，音の言葉を手の言葉に言い換え，手の言葉を音の言葉に言い換える，それが手話通訳というものですよね。そうしますと，当然，その言い換えの過程で，通訳者による解釈が入り込まないわけにはいかない。そういった解釈を通してしか通訳の仕事はできない。

以前，翻訳に「直訳」なんてありえないんだ，翻訳は常に「意訳」なんだという話を聞いたことがありますけれども，そうしますと，当然，いわゆる「同時通訳」の場合でさえ，通訳者による解釈が入り込まないわけに

はいかない。しかも，その解釈というのは，たっぷり時間をかけて慎重なうえにも慎重に解釈していくというのではなく，その場その場で瞬間的に解釈を行っていかなければならない。そうすると，通訳者による解釈がますます大きく入り込まざるをえなくなる。ましてや，「同時通訳」ではなく，「要約通訳」とでも言うんでしょうか，ある程度まとまった話を聞いて，その後でその話の趣旨を通訳する，というようなやり方をする場合は，通訳者による主観的解釈がますます大きく入り込まざるをえなくなる。

ですから，そういった問題を解決していくためには，手話通訳者のほうで通訳技術を向上させたり，ろうあ者理解を深めたりする努力をしていくことがもちろん必要なんでしょうけれども，それと同時に，そうした努力だけでは解消しつくせない面もあるんだということ，そういった問題は，通訳者を介して作られる三者関係という，ろうの人たちの対話の場の構造から必然的にと言っていいような形で出てくる問題でもあるということ，そういったことを理解しておくことが非常に重要なのではないかと思うんです。といいますのも，そういった部分，つまり，手話通訳者の側の努力だけでは解決しきれない部分は，手話通訳者とろうあ者の間のコミュニケーションと，それに基づく相互理解とによって乗り越えていくしかないのではないかと私には思えるからなんですね。

以上，「フラストレーションの蓄積」という問題をめぐって話して参りました。もうすでに言ってしまったことで，あらためて繰り返すまでもないことなんですが，こういった問題も，やはり，対話が間接化された状況といいましょうか，通訳者を介して作られる三者関係という対話の場の構造から起こってくる問題であるということ，そのことを充分に押さえておくことが非常に大切なのではないかと私は思います。そこのところを充分に押さえておかないと，手話通訳者とろうあ者との間に感情的な行き違いが起こることにもなりかねませんし，そういった意味でも非常に重要なポイントのひとつになるのではないかと思って，お話しさせていただいた次第です。

手話のことについてまったく知りもしない私のような者が，自分のことは棚に上げてこのようなことを申しますのは誠に無責任なことと思いますし，まったくもって恥知らずなこととは思いますけれども，今日のところは謙虚さも責任感もかなぐり捨てて，感じたこと，考えたことをそのままお話しさせていただくという約束でしたから，それに免じて，どうかお許し下さいますようにお願いします。

(4) 依存の関係

最後の問題に移ります。

＜資料５＞をごらん下さい。いずれも手話サークルの人たちとの関係について話されたものですが，それはこういう話です。

「手話サークルの人との交流はとても楽しいんだけど，同じ楽しい人でもね……。もうちょっと理解をもってほしい。」「実際に手話の通訳で行ったときなんか，やっぱり，ろうあ者のために親身になってくれない。」「もっともっと理解し合って，ろうあ者のためにやってほしい。手話をやってるんだったらもっとやってほしい。」

どの人も，手話サークルの人たちとの交流は楽しいとおっしゃいます。そして，だけどね，とおっしゃるんです。交流の楽しさだけではなく，私たちのことをもっと理解してほしい。もっと親身になってほしい，と。手話サークルの人たちに対するもの足りなさ，とでもいうんでしょうか。

その続きの資料をごらん下さい。これは少し年輩の方がなさった話なんですが，この方はこんなふうに話されています。

「いまは通訳者がいて昔より便利にはなっているんだけど，問題が全部なくなったわけじゃなくて，やりとりのことでもうおまかせ。頼るしかないってことで，もう，頼るんだけど……」「通訳者に本当にふさわしくな

い通訳者がいっぱいいるんだけど，しかたなしに頼むんです。しかたないですね。」

この方は，いまは通訳者がいて，昔に比べれば便利にはなったとおっしゃるんです。しかし，それで問題がなくなったかといえばそうではない。手話通訳の人に対する不満はいっぱいある。不満やいらだちはいっぱいあるんだけど，その通訳者に頼るしかないから頼ってしまう。しかたなしにお願いしてる。もう，しかたがないですね，と，そういう話です。

手話通訳者という立場でこんな話を聞かされたとき，皆さんはどんな気持ちになられるのでしょうか。「えーっ，私たち，そんなふうに言われてるの?!」とか，「そんなことを言われたんじゃあ，たまんないよねえ」というような気持ちになられるのではないでしょうか。「私たち，こんなに一生懸命やってててそんなことを言われたんじゃあ，たまんないよね。やるだけ損だわね」なんて気持ちがムラムラッとわきあがってくる，というようなことはないんでしょうか。

ある所で手話サークルの人たちにそんなふうに尋ねてみたときのことなんですが，ひとりの女性が，「私の場合はそんなことはないですね」とおっしゃっていました。その方は単に口先でそう言われているのではなく，心の底からそう思っていらっしゃるようでしたので，私は「立派な人だなあ」と，皮肉にではなく，本当にそう思ったんですが，私だったら，——もちろん，私が仮に手話通訳をやっていたとしたらの話ですけど，手話の手の字も知らないでこんなことを言うと笑われてしまいそうですが，仮に私が手話通訳をやっていたとして，その話を聞かされたとしたら，「こんなにやってるのにそんなことを言われるなんて，たまんないなあ」というような思いが，そう思ってはならないと思いつつ，でも，そう思ってしまいそうな気がするんですね。

だけど，そう考えてしまったらもうおしまいで，ろうの人って何て恩知らずなんだろう，なんてことになりかねませんし，そうなったらもう，最

初のあたりで言いました，「評価的判断様式」に舞い戻ってしまうことになると思うんですね。そして，そのあげく，「それだったらもう通訳やってあげないよ」とか，「手話なんてもうやーめた」なんてことにしかならないでしょうから，そこのところで「ちょっと待てよ」とストップをかけて，「これはいったい何だろう？」と，それを語った人たちの言葉に耳を傾けていく。そういうふうにしなければいけないと思うんですね。

そういうわけで，「しかたなしに頼むんですよ。もう，しかたないですね」という言葉にじっと耳を傾けていますと，私ごとになって申し訳ないんですが，私は，十数年前に亡くなった祖母のことを思いだしてしまうんですね。母方の祖母で，90歳過ぎで亡くなったんですが，当時私は学生で，郷里を遠く離れていましたので，後で母から聞いた話です。

私の母は長女で，私の父のところにお嫁にきて，4人きょうだいの末っ子で一人息子だった母の弟，つまり，私にとっては叔父に当たる人が家の跡を継いだわけです。その叔父のところで祖母は亡くなったわけなんですが，その最後の面倒をみていたのがその叔父のお嫁さん，つまり，私にとっての義理の叔母だったというわけですね。

祖母は亡くなる前の三年間くらいはいわゆる寝たきりの状態になりまして，自分の力では寝返りすらできなくなってしまったらしいんです。で，そういう状態になりますと，すぐ，床ずれができてしまいます。寝たきりなものですから背中や腰のあたりの血行が悪くなって，生きたまま腐っていくような状態とかで，とにかく痛くてたまらない。だから，誰かに頼んで頻繁に寝返りさせてもらわなければならないんですけれども，その世話をしていたのが，先ほど言った，私の義理の叔母だったというわけですね。

その叔母が意地悪だったと言いたいわけではないんです。むしろ，私が子どもだった頃，遊びに行くとおやつにおむすびを作ってくれたりする，やさしい人だったんです。だけど，三年間も世話している間には，いろんなことがあったと思うんです。疲れていたり，イライラしてたり，忙しかったり……。そんなとき，「寝返りさせてくれ」と言われるとついカッとなっ

て，「さっきしてあげたばかりなのに！」と思ってしまう。そんなことがあったとしても少しも不思議ではないと思うんです。人間のことですから，ね。で，そんなとき，思わず乱暴にしてしまう。そしたら祖母が「痛い，痛い！」と叫んでしまったという，そういうことがあったらしいんですね。

そのとき，叔母は，よっぽど気がたっていたんだろうと思うんです。祖母のその声にカッとなって，「そんなこと言うんだったらもうしてあげないよ！」と言ってしまったらしいんですね。しかし，そうなったら，もう，祖母としてはどうすることもできないわけですから，叔母に対して手を合わせて拝むようにして，「わがまま言って悪うございました。もう決してわがまま言いませんから，どうかやって下さい」と言って，泣きながら頼んだというんですね。後で母から聞いた話なんです。「そんなことがあったんよねえ」と母は言いながら，「あんなふうにはなりたくないねえ」と言っていました。

叔母の悪口を言いたいわけではないんです。「何というむごいことを！」と言いたいわけでもないんです。私がこんな話をしましたのは，絶対的に誰かに依存しなければならない関係性というもののイメージを皆さんにお伝えしたかっただけなんです。そういった関係のなかで，絶対的に依存しなければならない位置におかれていた祖母の心のなかには，どんな気持ちがあったのでしょうか。

手話通訳者とろうの人たちの関係がそのときの私の叔母と祖母の関係と同じだと言えば言い過ぎになりましょうし，いささかオーバーなことになりましょうけれども，関係のあり方としてみれば，そこには共通したものがあると言っていいと思うんですね。

「そんなこと言うんだったらもう通訳してあげないよ」と言われてしまったらおしまいになる関係。もちろん，皆さんのほうからそんなふうに言われるようなことはないでしょうけれども，たとえ皆さんのほうからは言われないとしても，ろうの人たちの側にしてみれば，そう言われてしまったらおしまいになる関係。そういった関係があるかぎり，通訳者に対してどん

なに不満があっても，それを口に出して言うことはなかなかできない。そうなると，不満はどんどんたまっていくばかり。そして，やがてはそれが怒りや不信感となっていき，通訳者のほうに向けられるようになっていく。

そうしますと，日常的に不満を言い合える関係というものが非常に大切になってくるのではないでしょうか。対話という言葉を使って表現するとしますと，ここでお話ししましたことも，依存しなければならない関係性のゆえに言いたいことも言わずに我慢してしまうところから生じてくるわけですから，この問題もやはり，対話が閉ざされた状況が生み出す問題だと言っていいと思うんですね。その場合，対話が閉ざされてしまうのは，単に音が聞こえないという物理的理由ではなく，関係のあり方そのものから起こってくるわけですけどね。

そういうわけで，ろうの人たちと手話通訳者の間の依存しなければならない関係性というものもろうあ者理解という点では非常に重要なポイントのひとつになるのではないかと思いまして，お話しさせていただいた次第です。

以上が「ろうあ者の内的世界点描・その4」です。

非常に言葉足らずな話で，言うべきことは他にもいっぱいあるような気がするんですが，残り時間も少なくなって参りましたので，一応「ろうあ者の内的世界点描」ということに関して以上のような話をさせていただいたところで，話をもとのところに戻して，もう一度最初の問題について考えてみたいと思います。

4. わかりあうために

最初の問題というのは，例の「甘え」の問題ですね。「私たちには足りないところがいっぱいあるから，手話通訳者は単に手話通訳者ということで終わらないで，私たちの足りないところを補ってくれる補足者でもあってほしい」というろうの人たちの気持ちを「甘え」と理解してしまっていいのだろうか，という問題ですね。

そこで，もう一度<資料1>をごらんいただきたいんですが，その資料の最後のところ，そこの部分を読んでみます。

「通訳のためにろうの人たちと一緒に行くとき，私たちは，もしかしたら失礼なことを言ったりしたりするかも知れませんけど，そういうとき，健聴者の人〔手話通訳者〕が知っていたら，私たちに失礼があったことを教えてほしい。聞こえないからしかたがないというんじゃなくて，やっぱり教えて，私たちを引き上げてほしい。情報がなくて知らないだけなんだから。教えてもらったらわかるんだから。」

この方は，「情報不足」ということを非常に強調しておられます。しかし，この方の話にじっと耳を傾けていますと，問題は単に情報が不足しているということだけではなく，もっと違った，別のところにもあるんじゃないかという気がしてくるんですね。

ろうの人たちはよく情報不足ということを言われるようですし，事実，そういう面は確かにあるんだろうとは思います。たとえば，『アイ・ラブ・コミュニケーション』のなかにも，洗剤をめぐるエピソードが紹介されていましたよね。テレビの音が聞こえないものだから，画面だけを見て，トンチンカンな解釈をしてしまったという話。洗濯機のなかに氷を入れて洗濯するという映像を使った洗剤のコマーシャルの話。そのコマーシャルは，氷を入れた冷たい水でも洗濯できるくらいにいい洗剤なんだぞ，というコマーシャルだったんですが，音が聞こえないものだから画面だけを見て，「なるほど，氷を入れて洗濯すればいいのか」と思ってしまったという，笑うに笑えない笑い話のような話。

そういう話にも出てきますように，ろうの人たちは，耳から入る情報から遮断されてしまっている。しかも，私たち健聴者の世界は，耳から入る情報が非常に大切だという世界。私のような本来書物に接することが仕事であるはずの人間でさえ，文字で学ぶよりはるかに，耳から学ぶほうが多

いくらいです。その耳学問ができないということ。それは大変なハンディですし，そのために，ろうの人たちは大変な情報不足になってしまう。

ですから，ろうの人たちが情報不足になりがちだというのは確かな事実なんだろうとは思うんですが，しかし，問題は，どうも，それだけではないような気がするんです。どうしてかといいますと，先ほどの＜資料１＞のような話を聞いていますと，ろうの人たちは自分が情報不足だということをすごーく気にしているというか，少しひどい言い方をすれば，すごーく気に病んでいるというか，そういうところがあるように思えてくるんですね。自分たちは情報が足りないんだ，足りないんだ，足りないんだ，というような思い。だから，自分たちが何かしようとすればきっと間違ってしまうに違いないんだ，というような思い。そういった思いといいましょうか，自己像といいましょうか，あるいは自己イメージといいましょうか，そういうものが強烈にあるように思えてくるんですね。

そういった思いや自己イメージというものは，もちろん，ひとつには，ろうの人たちが実際に情報不足になりがちだというところから出てくるんでしょうけれども，必ずしもそれだけではなく，先ほど「対人関係状況におけるあいまいさ」というところで言いましたように，何かトラブルがあったとき，ろうの人たちはすぐ，「自分が間違ったことをしたのではないだろうか」とか，「自分が何かよくないことをしたせいではないだろうか」というふうに，すぐ自分を疑うようになってしまいがちだというところからも出てくるのではないでしょうか。

そういったあれやこれやの理由で，ろうの人たちは何かあったらすぐ自分のほうに疑いの目を向けてしまって，自分たちは情報不足なんだ，自分たちが何かやったらすぐ間違ったことをやってしまうんだ，自分たちは間違ってしまうに違いないんだ，というような自己イメージをもってしまう。そうやって常に自分に自信がもてなくて，ろうの人は疑い深いという話がありましたけれども，他の人に対して疑い深いというより，はるかに，自分のほうに疑いの目を向けてしまっている。少々言葉が強すぎるかも知れ

ませんけど，そういった状況が多かれ少なかれあるのではないでしょうか。

単に情報不足だということと，自分は情報不足だという思いを強くもっているということとは，大変な違いだと思うんですね。単に情報不足なだけでしたら，その人は，いろんなことを自分が思うとおりにやっていけると思うんです。もちろん，情報不足なわけですから，トンチンカンなことをしてみたり，とんでもない失敗をしてみたり，というような結果になるかも知れませんけど。

それに対して，自分は情報不足だという思いがあまりにも強い場合は，自分の判断で何かしたら失敗するのではないかという不安も強くなりますし，自分に自信がもてなくなってしまいます。そうすると，何事についてもしりごみしたくなってしまいますし，思い切って自分で試してみようという気持ちにはなかなかなれなくなってしまいます。その結果，「どうすればいいの？」というふうに，すぐ他の人に尋ねてみたり，「私の代わりにやってちょうだい」といった調子で，すぐ人に頼ろうとする気持ちになったりしがちになると思うんですね。

そうしますと，そういった状況のなかで「そんなの甘えだ！」と言ってしまうのはどうなんでしょうか。「他の人に頼む前に自分でできることをギリギリのところまでやってみて，その後ではじめて人に頼むというのならともかく，初めっから人に頼ってしまうなんて，そんなの甘えだ！」と言ってしまうのはどうなんでしょうか。

そういった言葉は，もちろん，理屈としてはまったくその通りで，見事にスジが通っていて，返す言葉もないくらいなんですが，ただ，そういった言葉を言えるためには，そういった言葉を言える関係というものが成立していなければならないと思うんですね。たとえば，「間違ったっていいじゃない。自分でできることを自分でやってそれが間違いだとわかったら，そのとき直せばいいんだから。あなたが間違ったら『それは間違いじゃないの？』って私も言わせてもらうから，安心して自分でできることをやってごらんよ」とこちらから言って，それに対して向こうからは，「そう？

ほんとに言ってくれる？　必ず言ってちょうだいね」というような言葉が返ってくる。そういうやりとりができる関係といいましょうか，安心して間違いをおかすことのできる関係といいましょうか，その意味でとことん信頼しあえる関係といいましょうか，そういった関係があってはじめて，「まずは自分でできることを自分でやってみるべきだ」という言葉が切り捨ての言葉にならないですむでしょうし，相手に対する共感と励ましの言葉にもなるのではないでしょうか。そして，また，そう言われる側も，そういった関係のなかではじめて，「間違ってしまうかも知れないけど，自分でできることを自分でやってみようかな」という気持ちになれるのではないでしょうか。

ところが，現実には，必ずしもそういった関係はできていない。たとえば，通訳の人と一緒に学校に行って先生と相談するというようなとき，ろうの人が通訳者の顔をうかがいながら，「何だか変な顔をしているけど，私が言ってはいけないことを言ってしまったんだろうか」と考えこんでしまうような関係，あるいは，もっと一般的に言いますと，隣の人の不愉快そうな顔を見て，すぐ，「私が何か迷惑をかけたんじゃないだろうか」と考えこんでしまうような関係，そういう関係があって，そのなかで「それは甘えだ！」と言ってしまうとすれば，それは，まさしく，関係そのものを切り捨てる言葉になってしまうと思うんですね。

ですから，「私」がろうの人の話のなかに「甘え」を感じてしまったとして，「そんなの甘えだ！」と断定してしまわずに，そこのところで「ちょっと待てよ」と「待った」をかける。そういうふうにして自分の判断をいったんストップさせてみて，そのうえで，「いったいそれは何なのだろう？」と考えてみる。「私」がろうの人の話のなかの「何か」に対して「甘え」と感じた，その「何か」というのはいったい何なのだろう，「甘え」と言ってしまっていいのだろうか，それともそれ以外の何かなのだろうか，ろうの人の話のなかにはどうして「私」が「甘え」と感じるようなその「何か」が出てくるんだろうか，などと考えてみる。

そういったやり方を，私は，さし当たり，「事実的判断様式」という言葉で呼んでおこうと先ほど言ったわけですが，そうやってろうの人たちの言葉に耳をすましてみれば，「私」が「甘え」と感じたその「何か」というのは，単なる「甘え」というようなものではなく，むしろ，ろうの人たちが抱いている深い絶望感だとか，他者に対する，世界に対する，そして自分自身に対する確信のもてなさの表現だったのかも知れないというようなことが見えてくる。あるいは，また，ろうの人たちがおかれている状況の深刻さとか，そういったものが，その「何か」の背後に見えてくるかも知れない。

仮にそういったものが見えてきたとすれば，その分だけ，私たちのろうあ者理解はわずかなりとも深くなり，豊かになってきたわけですね。より一般的な言い方で言いますと，私たちの他者理解はそれだけ豊かになってきたことになると言っていいと思うんです。

次に，私たちの他者理解がわずかなりとも豊かになってきたということは，言い換えれば，私たちのものの見方や感じ方がそれだけ豊かになってきたことを意味するわけですから，そのわずかなりとも豊かになったものの見方や感じ方をもって自分自身を振り返ってみれば，以前よりは深く，豊かに，自分自身を理解することができるようになっているはずでもあるんですね。少なくとも，「そんなの甘えだ！」「それではダメだ！」というふうにしか感じることができなかった自分の感じ方や考え方というものが，あらためて見えてくる。そうしますと，私たちの自己理解も，その分だけ豊かになってきたことになると言ってもいいことになると思うんです。

一般的に言いましても，他者理解というのは，必ず，何らかの自己理解を伴うはずなんです。というより，自己理解を伴わない他者理解なんてありえないし，他者理解を伴わない自己理解というものもありえないと言っていいと思うんです。そうしますと，他者理解がわずかなりとも豊かになっていくときというのは，同時に，自己理解がそれだけ豊かになっていくときでもあるはずなんですね。

さらに，そういう形で他者理解がわずかなりとも豊かになり，自己理解が多少なりとも豊かになっていくということは，自分自身が人間的により豊かになっていくという意味での「自己豊富化」をも可能にしてくれると思うんです。しかも，そういうふうにして他者をより豊かに理解し，自己をより豊かに理解することを通してわずかなりとも豊かになった自分というものがあらためて他者と向かい合うとき，はじめて，その他者との間に，以前と比べればわずかなりとも豊かな関係を作っていくことも可能になってくると思うんです。

こういうふうに言えば，皆さんには，もしかしたら「うますぎる話」に聞こえるのではないでしょうか。しかし，決してそうではないんです。私自身，「うますぎる話」にならないようにと思って，話の随所に，「わずかなりとも」とか「多少なりとも」という言葉を意識的にはさんできたつもりなんです。ですから，いま私が話してきたことは，決して「うますぎる話」ではないんです。

それに対して，「評価的判断様式」といいますのは，それだけにしがみついているかぎり，そういった可能性を一切閉ざしてしまうやり方なんですね。だからこそ，「そんなの甘えだ！」という判断にしがみつき，それに固執しつづけてはいけないと私は思うんです。

しかし，それと同時に，私は，「そんなの甘えだ」という考え方や感じ方に対して，「そんな考え方や感じ方をしてはいけない」というふうに，ただ抑えつけようとしてもしかたがないとも思うんです。どうしてかといいますと，「そんな考え方や感じ方をしてはいけない」というのもしょせんはひとつの「評価的判断」にすぎないわけですから，「そんな考え方や感じ方をしてはいけない」というふうに抑えつけるということは，ひとつの評価的判断でもってもうひとつの評価的判断を抑えつけるということにしかならないと思うんですね。

そういったやり方でいくら抑えつけようとしてみたところで，元々のものの考え方や感じ方そのものは少しも変わっていかないわけですから，「そ

んなの甘えだ」という考え方や感じ方がなくならないばかりか，かえって内にこもってしまって，心のなかに根強く居座りつづけることにしかなりませんし，目の前に抑えつける人がいないところでは，「でもねえ」とか，「そうは言ってもねえ」とか，「やっぱりあんなの甘えよねえ」というような形で，仲間内でひそかにささやきあうことにしかならないと思うんですね。それだけ問題が陰湿化するだけではないかと思うんです。

ですから，そういった考え方や感じ方に対しては，それを抑えつけてしまうのではなく，その人の考え方や感じ方そののものを豊かにしていくことによって乗り越えていくしかないと私は思うんです。そのためには，そういった考え方や感じ方を抑え込んでしまうのではなく，「でも，ちょっと待てよ」とストップをかけてみる。そうしておいて，物事が語りかけてくる声にじっと耳を傾けてみる。つまり，先ほどからの言い方で言えば「事実的判断様式」にしたがってみるということになりますが，そうすることが必要なのではないかと私は思うわけです。

もちろん，だからといって，私は，評価的判断をしてはならないと言いたいわけではないんです。何度も言ってきましたように，その都度その都度評価的判断をしていかないことには私たちは生きていくことすらできないわけですから，評価的判断様式というのは私たちにとって絶対に欠かせない判断のしかたですし，大切な判断のしかたなんですけれども，ただ，そういった判断のしかたしかできなかったり，それにしがみついてばかりいるととても困ったことになる，ということを私は言いたかったわけです。

評価的判断だけにしがみついているかぎり豊かな他者理解も豊かな自己理解もできなくなりますし，自分自身を豊かにしていくことも他者との関係を豊かにしていくことも不可能になります。ですから，私たちが他者理解を豊かにし，自己理解を豊かにし，自分自身を豊かにし，他者との関係を豊かにしていくためには，絶えず評価的判断を下していくと同時に，その判断にいつでもストップをかけて，物事が語りかけてくる声にじっと耳を傾けてみるということを常にやっていかなければいけない。そういうこ

とが大切なんじゃないかということを私は言いたかったわけです。そして，そういうやり方を，私は，「事実的判断様式」という言葉で言いたかったわけです。

5. お わ り に

以上，わかりあうためにはどういうことが必要なのかということについて私が考えてきたことをお話しさせていただきました。時間の関係で大急ぎで話してしまいましたので，言葉足らずになってしまった部分も多々ありますけれども，その点，どうかご了解下さいますようにお願いします。

お話ししようと思っていたことは以上で一応終わりなんですが，最後にあと何点か，補足的なことを付け加えさせていただきたいと思います。

まず第一点目は「音の迷惑」ということに関してですが，これまでの話のなかで，音のルールというのは本来は健聴者による健聴者のためのルールなんだけれども，ろうの人たちにもそのルールを押しつけているという関係になっているんだという話をしたところ，大変な反発を受けてしまった，ということを申しました。その点について，少しだけ補足しておきたいと思います。

「押しつける」という言葉は，確かに，言葉の使い方としては，いささか乱暴だったかも知れないとは思います。しかし，だからといって，関係のあり方としてみれば，私が言ったことは間違いではないと思うんです。つまり，私たち健聴者のひとりひとりが明確な意識をもって意図的に押しつけをやっている，なんてことはもちろんないでしょうけれども，関係のあり方としてみれば，やはりそういう関係になっていると言っていいと思うんです。

仮に，その関係が逆だったとすればどうなっていただろうか，と考えてみるのもいいのではないでしょうか。たとえば，ほんの少数の人だけ音が聞こえて，残りのほとんどの人は音が聞こえないというような社会が仮にあったとしたら，どうなっていたでしょうか。もちろん「仮に」の話です

けれども，仮にそういう社会があったとしたら音が聞こえないことが正常とみなされていたでしょうし，健聴者のほうは音とやらいうものをやたらと気にする異常な人間たちという扱いを受けてしまっていたのではないでしょうか。

ところが，実際には，健聴者のほうが圧倒的に大多数で，音が聞こえない人は圧倒的に少数派。そのため，音のことに気をつけるのが当たり前ということになってしまって，ろうの人たちも音のルールにしたがわなければならなくなってしまっている。そういった関係は厳然としてあるわけなんです。

ところが，私は，大変な反発を受けてしまったんですね。「押しつけてるだなんて，そんなことはないですよ。隣どうしで住んでいて，お互いに気をつけるのが当然じゃないですか！」という反発ですね。で，「そりゃあそうだ」と私も言ったんです。「お互いに気をつけてほしいよね」って。「でもね，ろうの人たちというのは，その音が聞こえないんだよね」って。

そこらあたりの問題を考える場合，ろうの人たちがかける音の迷惑というものを，暴走族とか無神経な人たちがかける音の迷惑と比べてみるのが一番いいのではないかと思います。

まず，暴走族ですが，私が住んでいる所でも，決まって深夜12時を過ぎてから，近くの国道を走る暴走族らしいバイクの音が聞こえてきます。エンジンを意識的にふかして，大きな音をたてていきます。私が住んでいる所はその国道から少し離れているからそれほどでもないんですが，近くに住んでいる人はたまらないだろうなと思います。

その暴走族ですが，暴走族というのは，まわりの人が迷惑がるのを面白がって暴走しているような気がするんですね。もちろん，排気量の大きいバイクのドッドッドッドッという腹にこたえるようなエンジンの音は確かに快感ではありますけど，そういった快感を味わうために暴走やってるわけではないと思うんです。だから，誰の迷惑にもならない中国山脈のど真ん中に幅百メートル延長10キロぐらいのりっぱな舗装道路を造ってやって，

「暴走やりたいんだったらここで思う存分やりたまえ」なんて言ってやったとしても，そんなところで暴走するような暴走族はひとりもいないと思うんです。第一，誰にも迷惑がられない暴走族なんて面白くもなんともないでしょうし，考えただけでも滑稽ですよね。だからこそ，暴走族は，夜ふけて人が寝静まったころになってからはじめて，わざと耳障りな音をたてて走りまわるのではないでしょうか。

それに対して，ろうの人たちがかける音の迷惑というのは，迷惑をかけないように，かけないようにと気をつけていても，自分の気づかないところでつい迷惑をかけてしまうという形なんですね。ですから，暴走族がかける音の迷惑とはまったく違う性質のものなんです。一方はまわりの人が迷惑がるのを面白がって意識的に迷惑をかけようとしてかけている音の迷惑。もう一方は，迷惑をかけないように，かけないようにと気をつけていても，自分ではそれと気づかないうちにかけてしまう音の迷惑。同じ音の迷惑といっても，その性質はまったく違うわけなんです。

次に，無神経な人がかける音の迷惑。たとえば，午前三時のカラオケの音，なんていうのはどうでしょうか。夜遅くまで仕事をして，なかなか寝つけない夜の苦しみ。そうやってようやく寝入ったばかりの午前三時。そのとき，突然，めいっぱいボリュームをあげたカラオケの音が隣から聞こえてくる，なんていうのはどうでしょうか。それこそ，まさしく，無神経な人がかける音の迷惑というものではないでしょうか。

それに対して，ろうの人たちがかける音の迷惑は，まるで違う性質のものなんです。ろうの人たちは無神経などころか，むしろ非常に神経質。神経質という言葉がよくないとすれば，音のことにとても気を使ってしまう。テレビの音が大きすぎるんじゃないか，子どもの声がうるさいんじゃないか，廊下を歩く足音が隣の人に迷惑をかけてるんじゃないかと気になって，だから，隣の人が不機嫌そうな顔をしていると，つい，自分が何か迷惑をかけたんじゃないかと気にしてしまう。

そういった具合で，先ほども言いましたように，一方には音のことに無

神経な健聴者がいて，他方には音のことに神経質なろうあ者がいるという，何とも言いようのない皮肉な状況が生まれている。それなのに，その音が聞こえないものだから，つい，自分ではそれと気づかぬうちに音の迷惑をかけてしまう。それがろうの人たちがかける音の迷惑というものだと思うんです。

とするなら，私たちはどうすればいいのでしょうか。まわりの人が迷惑がるのを面白がってわざと迷惑をかけているというのではなく，無神経さゆえに迷惑をかけているというのでもなく，音のことに気をつけようと思っても，その音が聞こえないものだから，自分ではそれと気づかぬうちに迷惑をかけてしまうんだとすれば，私たちはどうすればいいんでしょうか。どんなに迷惑でも我慢すべきだとか，迷惑かけられたってしかたがないとは思いません。やっぱり音は迷惑だと私も思います。とするなら，私たちはどうするんでしょうか。直接言いに行くのではないでしょうか。「すみませんが，テレビの音を少し小さくして下さいませんでしょうか」と言いに行くのではないでしょうか。

ところが，たいていの場合はそうはしないで，遠くからいやあな顔で見てるんですね。「迷惑よねえ」「隣にろうの人がいると困るのよねえ」とか言いながら。そして，それがアパートだったりしたら，あげくの果てには大家さんのところに行って，「ろうの人をアパートに入れないで下さい」と文句を言ったりする，なんてことになりかねない。

そういった関係があればこそ，ろうの人たちはますます隣の人の表情をうかがわなければならなくなってしまうでしょうし，「あれっ，変な顔。私が何かよくないことをしたのかしら」というふうに，ますます神経をとがらせていなければならなくなってしまうのではないでしょうか。そして，また，そういった関係があればこそ，話のなかで言いましたように，「対人関係状況におけるあいまいさ」という問題もますますひどくなっていくでしょうし，ろうの人たちの生きにくさも，それだけますますひどくなってしまうのではないでしょうか。

安心して言ってもらえる関係があったら，ろうの人たちの生き方も，ずいぶん楽になるのではないかと思うんです。「迷惑だったら言ってよね」「ええ，言わせてもらいますよ」と言い合える関係があって，迷惑なときには直接言ってくれるんだという安心感をもつことができさえすれば，それだけでも，ろうの人たちの生きにくさは，わずかなりとも軽くなるのではないでしょうか。そして，そうなったとき，はじめて，「対人関係状況におけるあいまいさ」という問題も，ずいぶんと解消されていくのではないでしょうか。

ですから，「隣どうしで生活してるんだから，お互いに我慢するのが当然でしょ！」というのではなく，「すみませんが……」と言い合える関係を作ること。もちろん，お互いに我慢できる我慢はするとして，我慢できない我慢はしない。我慢できない我慢をしていると，心のなかで「クソッ，クソッ，あの野郎！」なんてふうに思うようになったりする，ということにしかなりませんから，やっぱり我慢できなくなって，大家さんところに文句言いに行く，なんてことになるのがオチだろうと思うんです。

だからこそ「すみませんが……」と言い合える関係を作ること。そういう関係を作ろうとしないところで「我慢し合うのが当然でしょ」「お互いに気をつけ合うのが当然です」なんてふうに私たち健聴者が考えているからこそ，ろうの人たちの生きづらさも，ますますひどいものになってしまうのではないでしょうか。

以上，「音の迷惑」ということについて補足させていただきましたが，最後に，もう二点ほど，余分なこととは思いつつ，念のためにつけ加えさせていただきたいと思います。

まず第一点目はこれまでの話のなかで利用させてもらった資料の性質についてですが，この資料は，「日頃不満に思っていることとか，これまで腹がたったことを聞かせて下さい」という形で聞かせてもらった話でありまして，楽しかったことや嬉しかったこと，ありがたかったことなどについては一切聞いていないわけなんです。ですから，「批判ばっかりしてる」と

か「不満ばっかり言ってる」というふうには決して考えないでいただきたいんです。そもそも，批判や不満だけを聞かせてもらった話なんですから。ですから，そういった批判や不満に対しては「なによ！」というような形で反応するのではなく，そういった批判や不満から何が聞こえてくるかということにじっと耳を傾けてみる，というふうに，この資料を受けとめてほしいのです。

そんな心配はまったく余計な心配で，言うだけ野暮なことかも知れないとは思いつつ，万が一誤解を招くようなことがありますと話を聞かせて下さった人たちに対して誠に申し訳ないことになりますし，ろうの人たち全体に対しても，また，手話通訳をなさっている人たち全体に対しても申し訳ないことになると思いまして，ホントにホント，余計なこととは思いつつ，念のために言わせていただきました。

それともうひとつ。これもまた，本当に余計なこととは思いつつ，念のために言わせていただきたいんですが，つまらぬ詮索は決してしないようにしてほしいんです。つまり，「こんなことしゃべったのは誰だろう。○○町の○○さんじゃないかしら」とか，「この手話通訳者というのは誰だろう。きっと○○町の○○さんよ」とか，そういった詮索はしないでほしいんです。そんな詮索をするのは邪道だと思いますし，そんなつまらぬ詮索に心を奪われるより，話の中身に耳を傾けてほしいんです。そうしないと，話を聞かせて下さった人たちに対して，本当に申し訳ないことになると思うんです。

この点につきましても，ホントにホント，まったく余計なことと思いますし，こんなことを言えばそれだけで，皆さんに対して大変失礼なことになってしまうとは思いつつ，しかし，万が一そんなことがあったら大変だという思いでつけ加えさせていただきました。

予定の時間を少しオーバーしてしてしまいましたけれども，最後にもうひとこと。いままで話をさせていただきながら，正直なところ，緊張のあまり胃のあたりが痛くなったり，恥ずかしく思ったりしています。わずか

一回きり，90分ほどの話を聞かせていただいただけなのに，毎日毎日を大学教師として安穏に暮らしている私のような者が，皆さんのような人たちの前でよくまあ偉そうに話ができるもんだねと，我ながらあきれてしまいそうな気分です。

手話通訳をずっとやってこられた皆さんのような人たちがこうやって30人も集まっておられますと，私には思いも及ばないようなすごい人が何人もいらっしゃるんだろうと思います。最近はファクスが普及してきて少しはよくなってきたのかも知れませんけど，ろうの人からの連絡をポケットベルで受ける体制を作っておられて，ポケットベルが鳴ったらすぐ駆けつけていくという，電話が使えれば「何かご用？」と電話でやればすむところを，その電話が使えないからすぐ車で駆けつけていくという，そういう人がいるんだという話を聞いたことがあります。きっとこの場にもそんな人がいらっしゃるんでしょうに，そんな人たちを前にして私のような者がしゃあしゃあと話す恥ずかしさ，消え入りたいような私の気持ち，口に出して言わないとわかっていただけないでしょうから，口に出して言わせてもらいました。

それとともに，ここで話す機会を与えて下さったことに，とても感謝しています。ろうの人たちの話を聞かせていただいて，ろうというのは主として対話の障害であることとか，対話の障害がどんな問題を生み出すのかというようなことを学ばせてもらいました。そして，そのことを通して，対話というものが人間にとってどれほど大切なものかということ，人間の精神生活にとってそれがどんなに重大な意味をもつものなのかということも考えさせてもらいました。そういった意味で，本当にいい勉強をさせてもらったと思って感謝している次第です。

もちろん，最初に言いましたように，私の話には理解の浅いところや間違ったところ，トンチンカンなところなど，いっぱいあっただろうと思います。でも，謙虚に構えるのはやめにして，間違いでも見当違いでも構わない，トンチンカンなことでも構わないから，感じたこと，考えたことを

そのままお話しするというつもりで話をさせていただきました。ですから，もし私の話のなかに「なるほど，そうだね」と皆さんが感じられるようなことが少しでもありましたら幸いですし，たとえ間違いだらけだったとしても，「あれは間違いよね」とか，「あれはこれこれこういうふうに考えるべきだよね」というふうに皆さんの間で話し合っていただければ，皆さんの討論や議論のための素材の提供といいましょうか，会話を活性化させるための触媒の役割といいましょうか，そういった形で，私の話がお役に立てたことになると思うんです。せめてそう考えることによって自分を慰めようと思います。

以上で終わります。長い時間，どうもありがとうございました。